

「エレッツ・イスラエルからの真実」の真実 —— アハド・ハアムと「アラブ問題」 ——

崎川あんぬ*

精神的（文化的）シオニズムの提唱者、アハド・ハアムが1891年に執筆した論考「エレッツ・イスラエルからの真実」は、シオニズム研究において頻繁に引用される文献の一つである。その主な理由は、この論考がいわゆる「アラブ問題」、つまりパレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人との確執についての分析を含む最初の文献として重視されてきたことにあるだろう。そのため、これまでこの論考に関する言及のうちの大半が「アラブ問題」に関連するものであって、論考全体についてはあまり考察の対象とされてこなかった。そこで本稿では、A・ダウティによる英訳版（全訳）および解説文を用いて、まずこの論考の全体像を概観し、そのなかでの「アラブ問題」の位置付けを確認した上で、このテーマに関するアハド・ハアムの見解について再考することを目指した。また、解説文中に見られる「アラブ問題はこの論考の主な関心事ではなかった」、というダウティの主張について検討することも一つの目標とした。

考察の結果、「アラブ問題」が論考全体に占める比率は極めて低いことがわかった。また当時のアハド・ハアムの態度に幾分、曖昧な点が認められることから、ダウティの主張には一定の妥当性があるということを認めるに至った。一方で、彼の主張がこの論考における「アラブ問題」についての記述の重要性まで否定する根拠とはならず、ここでのアハド・ハアムの見解は、その先見性、的確さにおいて高く評価されるべきであるということを確認した。また、のちにアラブ人との平和的共存を目指したユダヤ人たち、特にM・ブーバー、J・マグネス等のバイナショナリストたちに彼が与えた影響を考慮しても、この論考の持つ意義は大きいという結論に至った。

キーワード：アハド・ハアム、「アラブ問題」、バイナショナリズム

I. はじめに

「精神的（文化的）シオニズムの父」とも呼ばれるユダヤ思想家アシェル・ツヴィ・ギンツベルク（Asher Tzvi Ginzberg, 1856-1927）、即ちアハド・ハアム（Ahad Ha'am, またはAchad Ha-amとも表記）が1891年に執筆した論考“Emet m'erezt Yisrael”，即ち「エレッツ・イスラエルからの真実」¹は、初期シオニズム

* さきかわ・あんな、埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程

¹ この論考の表題の英訳については、本稿で使用するA・ダウティ訳のように“Truth from Eretz Yisrael”としている文献と、L・サイモンのように“Truth from Palestine”と訳

研究において頻繁に引き合いに出される文献の一つである。この論考が注目されてきたのは、それが所謂「アラブ問題」についての最初の批判的考察として重要な意味をもっているからだだろう。以下にその一部を引用する。

[エレツ・イスラエルの] 外にいて、我々は、アラブ人たちが皆、砂漠の野蛮人で、ロバのようで、彼らの周りで起こっていることを見てもいなければ理解もしていない、そう信じがちなことである。しかしそれは大きな間違いだ。(…)もしエレツ・イスラエルにおける我々の暮らしが、先住民たちの暮らしを侵害するようなところまで発展するときに来れば、彼らは簡単には自分たちの場所を明け渡さないだろう (TR: 162, [] 内は翻訳上の補足。以下同様)。

ところで我々の同胞たちはイスラエルの地で何をやっているのか。(…)そして見よ、彼らは敵意と冷酷さのうちにアラブ人たちと歩み、その権利を不当に侵害し、恥知らずにも正当な理由もなく彼らを叩き、さらに自分たちのしていることを自慢さえしている。(…) (TR: 175)。

この二箇所から分かるように、この論考のなかでアハド・ハアムは、ユダヤ人入植者たちに対して「エレツ・イスラエル」、つまり(地理的名称としての)パレスチナに先住するアラブ人たちへの偏見を捨てるように、また彼らに対する不当な扱いをやめるように訴えており、将来的にはアラブ人住民たちとの確執が大きな火種となるであろうことも警告している。

周知の通り、いわゆる「パレスチナ問題」は現在も膠着状態にあり、これまでにさまざまな和平交渉の試みがあったものの、未だ解決への道筋は見えないままである。昨今はイスラエルの更なる右傾化に伴い、状況は悪化の一途を辿っているようにさえ思われる。この民族間²の争いの深刻さとその長期化を、

しているものがある。ちなみに独訳についても、*Der Jude* に掲載された訳は“Wahrheit aus Palästina”であるが、“Wahrheit aus dem Land Israel” (Buber 1993: 13) という訳も存在する。邦訳としては「イスラエルの地からの真実」あるいは「パレスチナからの真実」が主であるが、本稿では熟慮の結果、原語で使われている Ysrael という呼称のニュアンスを生かし、且つ現在の国家としての「イスラエル」との区別を明確化するという意図からも、鶴見太郎に倣って「エレツ・イスラエルからの真実」(鶴見 2012: 328) とすることを選択した。ダウティは Eretz Yisrael を Palestine と同義であるとした上で、アハド・ハアムがこの論考のなかで Palestine という語彙を用いていないということを註で断っており (TR: 179 の註 2 を参照されたい)、そのようなことを考慮すると、やはり Eretz Yisrael という呼称を日本語訳にも生かすのが適切であるとも考えた。また、パレスチナ(「ペリシテ人の地」の意)という呼称が 135 年のバル・コホバの反乱の鎮圧後にローマ人が「ユダヤ的なもの全ての記憶を消すために」(『小百科』: 800) 決めたものであることを考えると、ユダヤ民族主義的なアハド・ハアムの論考のタイトルとしては馴染まないようにも思われる。ちなみにアハド・ハアムは、この“Emet m'eret Yisrael”というタイトルのもとで 1891 年、1893 年の 2 回、論考を発表しているが、本稿では前者のみを考察の対象とする。詳細は本稿の II-1 で後述する。

² 臼杵 2009 の第一章に詳述されているように、そもそも「ユダヤ人」「ユダヤ民族」という定義自体が明確なものではない。そのようなことを考慮すると、果たしてこれを「民族間の争い」と呼んでよいのか、という議論にもなってくるだろう。

シオニズム最初期³の1891年に、すでにアハド・ハアムが「予言」していたことには驚きを禁じえない。今日もアクチュアルなテーマとして人々の関心の的であり続けているこの問題に誰よりも早く注目し、警鐘を鳴らしたのがアハド・ハアムであり、またこの「エレッツ・イスラエルからの真実」（以下、『真実』と略記。論考名には「」を用いるのが慣例であるが、便宜上、この略称に限って『』を用いる）という論考なのである。『真実』が度々、引用されてきた理由は、まさにこの「アラブ問題＝the Arab issue」⁴、つまりパレスチナにおけるユダヤ人とアラブ人との間の確執、についての言及にあると言えるだろう（もっとも「アラブ問題」という呼び方はユダヤ人側から見た一方的なものであるが、本稿で援用するA・ダウティの解説文では“the Arab issue”という語彙が頻出するため、その訳語として便宜上「アラブ問題」という表現を用いていることを断っておく）。

しかし、その注目度の高さにも関わらず、意外なことに『真実』は数々のシオニズム関連著作のなかで部分的に翻訳されてきたものの、その全文の英訳は長い間、存在していなかった。アハド・ハアムの論考の多くを英訳して世に出したレオン・サイモン編集の論考集⁵にも、なぜか『真実』は収録されていない⁶。そのため、その全貌を知るためにはヘブライ語で書かれた原典を用いなければならなかった⁷。しかし、2000年にアメリカの歴史学者、A・ダウティ（Alan Dowty, 1940-）による全訳（英訳）が発表され、英語での読解・分析も可能になった。また、この翻訳の前書きとして書かれたダウティの解説文は、これまで「アラブ問題」に関する言及ばかりに注目が集まっていたこの論考の全体像を概観するための助けとなる貴重な研究である⁸。

³ 「シオニズム」という呼称は、ウィーン生まれのジャーナリスト、N・ビルンバウム（Nathan, Birnbaum, 1864-1937）が、1890年に自身の編集するドイツ語の新聞『自己解放（Selbst-Emanzipation）』で用いたのが最初であるとされる（鶴見2012：付録3, 24）。「シオニズム」は、その名称の初出年である1890年以降の活動を指すと考えることもできるし、またヘルツルの『ユダヤ人国家』あるいは第一回シオニスト会議以降が「シオニズム運動」の始まりであるとしている文献もある。後者のように考えるのであれば、『真実』の書かれた1891年は「前シオニズム期」ということになる。しかしヘルツル登場を「シオニズムの始まり」とすることにはラカーは否定的である。詳しくはLaqueur 1972: 40／邦訳: 63を参照されたい。名称の発案者ビルンバウム自身は、その後、シオニズムからは距離を取るようになり、超正統派のアグダト・イスラエルの指導者となった（Laqueur 1972: 81／邦訳: 121）。

⁴ “the Arab question”と呼ぶ場合もある。

⁵ *Selected Essays by Ahad Ha-Am, Ten Essays on Zionism and Judaism, Ahad Ha-Am, Essays, Letters, Memoirs.*

⁶ サイモンはアハド・ハアムの伝記を著しているが、そのなかでこの論考の概要を紹介している。詳しくはSimon 1960: 57-75を参照されたい。

⁷ ちなみに、ブーバーの編纂した月刊誌「ユダヤ人（Der Jude）」第7号にある独訳“Wahrheit aus Palästina”は、1891年に発表された「第一部」と1893年の「第二部」の両方から一部を切り取って繋げたダイジェスト版である。

⁸ ダウティは2021年に刊行された著書の中でも『真実』について再び詳述している（Dowty 2021: 154-179）。尚、ダウティの翻訳はKaplan/Penslar [ed.] 2011: 27-38, およびShazt [ed.] 2004: 32-34にも部分的に掲載されているが、後者は「アラブ問題」に関連する箇所のための引用である。

そこで本稿では、上述のダウティによる英訳、および解説文に依拠しながら、この論考全体の構成を概観し、そのなかで「アラブ問題」がどのように位置付けられているのかを確認する。それを踏まえた上で、断片的な引用からは汲み取れなかったアハド・ハアムの発言の真意を、より大きな文脈の一部として捉え直していくことを目標としたい。その際、解説文中に見られる「アラブ問題はこの論考の主な関心事ではなかった」というダウティの見解の是非についても検討する。また、この初期論考におけるアハド・ハアムの主張を、晩年の論考「バルフォア宣言の後で」における「アラブ問題」観と比較したうえで、最後に、アハド・ハアムの主張がのちの「ブリット・シャローム (Brit Schalom)」⁹、「イフード (Ihud, Ichud)」¹⁰等のバイナショナリズム運動に与えた影響について考えることを通して、この「エレツ・イスラエルからの真実」という論考の意義について私見を述べることで結語とする。

一次文献としては、Alan Dowty, Ahad Ha'am and Asher Ginzberg, "Much Ado about Little: Ahad Ha'am's 'Truth from Eretz Yisrael,' Zionism, and the Arabs," *Israel Studies*, Fall 2000, Vol.5, No.2, (Fall 2000), 154-181 のうち、160-179 頁の英訳を使用する。この文献は解説文と翻訳が一つのタイトルのもとで括られており、154-159 頁が解説文（前書き）、160-179 頁（前半）が『真実』の英訳、179 頁（後半）-181 頁が解説文を含めた全体の註、という構成になっている。本稿ではこれら全てを一つの文献として扱い、以下、TR と略記する。また月刊誌 *Der Jude, Jarg.*7 に掲載された独訳（文献表を参照されたい）も適宜、参考にする。

本文中の訳文は、基本的に筆者が訳出したが、文献表に邦訳版の記載があるものに関しては既訳を適用し、出典を註に示す。

以下、本題に入る前に、『真実』についての基本情報、執筆の背景を確認しておこう。

Ⅱ. 「エレツ・イスラエルからの真実」に関する基本情報と執筆の背景

1. 基本情報

「エレツ・イスラエルからの真実」は、1891 年 2 月 26 日から 5 月 17 日の間に実施されたアハド・ハアム最初のエレツ・イスラエル（パレスチナ）視察旅行後に書かれたもので、1891 年 6 月 19 日から 30 日（ユダヤ暦 5651 年シヴァン 13 日から 24 日）の間にヘブライ語日刊紙ハメリッツ¹¹に連載された¹²。ダウティによれば、この論考のタイトルは、詩篇の一節 “Emet m'eretz tismah”

⁹ 「ブリット・シャローム」は「平和同盟」を意味する。1926 年に A・ルッピン (Arthur Ruppin, 1876-1943) によって設立された団体。「二民族国家」を構想した。詳しくは Buber 1993: 105ff／邦訳：47ff を参照されたい。

¹⁰ 「イフード」は「ブリット・シャローム」の後継団体。1942 年に改革派ラビの J・マグネス (Judah Leon Magnes, 1877-1948) の呼びかけにより結成された。詳しくは Buber 1993: 202ff／邦訳：132ff を参照されたい。

¹¹ Ha-Meritz (ヘブライ語で「主張」) はロシアのヘブライ語定期刊行物。A・ツェデルバウム (Alexander Zederbaum, 1816-1893) によってオデッサで創刊され、ロシア・ユダヤ人の世論を反映した (Noveck 1963: 311／邦訳：390)。

¹² TR: 154

(真実はこの土地から湧き出す)¹³から着想したものであるらしい。「エレット(eretz)」はヘブライ語で「土地」を意味するので、「エレット・イスラエル」とは文字通り「イスラエルの地」¹⁴という意味である。聖書でいう「カナン」、ユダヤ人にとっての「約束の地」と考えてもよいだろう¹⁵。また、地理的な意味での「パレスチナ」と同義と考えて、例えば L・サイモン (Leon Simon, 1881-1965)¹⁶、S・ズィッパースタイン (Steven Zipperstein, 1950-)¹⁷のように、“Truth from Palestine”：「パレスチナからの真実」とする場合もあるが、アハド・ハアム自身は「パレスチナ」という呼称はこの論考では用いていないようなので¹⁸、本稿では「エレット・イスラエルからの真実」と訳している（詳しくは本稿の註 1 を参照されたい）。

ちなみにアハド・ハアムは 1893 年にもエレット・イスラエルを視察している。その 2 回目の旅の後の記録は、「エレット・イスラエルからの真実、第二部」として、同年の 8 月 15 日から 17 日に再びハメリッツに連載されたが、この第二部では「アラブ問題」については触れられていないようである¹⁹。本稿で使用するダウティの翻訳も、1891 年の「第一部」のみに対応している。そのため「アラブ問題」に関心事とする本稿では、「第一部」に限定して論じていく。つまり、ここで『真実』と呼んでいるのは 1891 年に書かれたものを指す、ということと断っておく。

この『真実』が書かれる二年前の 1889 年に、アハド・ハアムは論考 “Lo zeh ha-derekh” (“The Wrong Way”：「誤った道」、または “This Is Not the Way”：「これは道でない」とも訳される)²⁰を発表している。自身も所属する初期シオニスト組織である「ホヴェヴェイ・ツィオン」²¹による入植活動を痛烈に批判したこの論考は、組織内外からの激しい批判に晒された²²。『真実』は基本的には

¹³ TR:179, Notes 1 を参照。詩篇 85 章 12 節「まことは地から萌えいで、正義は天から注がれます」（『新共同訳』より）。

¹⁴ 聖書における「父祖の土地」“ancestral land”に近いニュアンスである。

¹⁵ 『小百科』：800 を参照されたい。

¹⁶ サイモンはアハド・ハアムの信奉者で伝記作家。アハド・ハアムの論考を多く英訳、出版している。

¹⁷ ズィッパースタイン (Steven Zipperstein) は、アハド・ハアムについての詳細な研究で知られ、ダウティも彼の見解を度々、引き合いに出している。

¹⁸ ダウティはここでの「エレット・イスラエル」という呼称について以下のように説明している。「文字通り、〈イスラエルの地〉のことで、地理的な用語としての〈パレスチナ〉と同義のヘブライ語である。もっともアハド・ハアムは〈パレスチナ〉という言葉がこの記事の中では使っていない」（TR:179, Notes 2）。

¹⁹ この点については、TR: 157 のダウティの記述を参照されたい。

²⁰ ヘブライ語の原題のニュアンスから考えると、後者のほうが正確であるとも言えるが (Lo=no, zeh=this, ha は冠詞, derekh=way), 本稿で参照しているサイモン訳では前者をとっているため、ここでは「誤った道」で通すこととする。ちなみに「誤った道」は、ギンツベルクが「アハド・ハアム」（「民の一人」の意）というペンネームで発表した最初の論考である。このペンネームの由来については EW: 333 および Simon: 48 を参照されたい。

²¹ ホヴェヴェイ・ツィオンは 1882 年頃にロシアで形成された前シオニズム的組織。中心人物は『自力解放』執筆で知られる L・ピンスケルであった。

²² 「誤った道」(TE: 1-24) については、崎川 2022 で取り上げた。

この二年前の論考の方向性を受け継いでおり²³、そのなかで彼は引き続きホヴェヴェイ・ツィオンの楽観的過ぎる運営方針に苦言を呈している。アラブ人についての言及も、その「苦言」のうちの一つである。『真実』の連載によって、結果的にアハド・ハアムは再び多くの同志たちから攻撃されることになった。この論考が書かれた 1891 年は、トルコ政府による移民規制が緩和されたことから、ホヴェヴェイ・ツィオンの活動状況が一見、好転しているかのように見えた年でもあった²⁴。そのような「熱狂と希望が蘇った」(Simon 1960: 61) 時期に、いきなり活動に冷や水を浴びせるようなこの論考が発表されたことは、当然のことながら組織内部からの怒りを買ったのである。批判者たちのなかには、「誤った道」におけるアハド・ハアムの主張に賛同する者たちによって結成された精鋭集団「ブネイ・モシェ」²⁵のメンバーも含まれていた²⁶。特に衝撃的だったのはアハド・ハアムの旅に同行した M・ウスィシュキン (Menahem Mendel Ussishkin, 1863-1941) ²⁷からの批判である。彼は『真実』におけるアハド・ハアムの主張のほとんど全てを退けた²⁸。ウスィシュキンからの反論の内容については後述するが、このように『真実』のもたらした波紋は大きく、結果的にアハド・ハアムは自らが〈リーダー〉であったはずのブネイ・モシェのなかで孤立することになり²⁹、また組織の結束も綻び始めた。そのときの様子について、アハド・ハアム自身も回顧録のなかで語っている。

それ [ブネイ・モシェ] が存在する以上、私はそのトップであると思われていた。しかし実際には私がその地位にあったのはほんの短い間だった —— つまり、私が 5651 年³⁰にパレスチナに行くまでの間である —— その後、リーダーシップは他の人の手に移った (EW: 334)。

このような結果となることは、アハド・ハアムも重々承知であったと思われる。「誤った道」の時と同様、彼の歯に衣着せぬ批判が同胞たちの怒りを買うことは必然であったが、それを覚悟の上で、彼は〈真実〉を伝えることを選ん

²³ 二つの論考の連続性についてはダウティが指摘している (TR: 154 参照)。

²⁴ トルコ政府による規制緩和については、TR: 155, Simon 1960: 61, Zipperstein 1993: 57 等を参照されたい。なお、この件についてはサイモンが特に詳述している。

²⁵ 「モーセの息子たち」の意味。「ブネ・モシェ」とも呼ばれるが、多くの日本語文献が「ブネイ・モシェ」と表記しているので本稿もそれに倣う。ブネイ・モシェ創設の経緯についてはアハド・ハアム本人による回顧録のなかで語られている (EW: 334)。また Simon 1960: 58-59 も参照されたい。ブネイ・モシェの活動については、Kornberg [ed.] 1983: 98-105 に収録されている Joseph Salmon の論文, “Ahad Ha-Am and Benei Moshe: an ‘Unsuccessful Experiment’?” にも詳しい。

²⁶ 「誤った道」の刊行は「ブネイ・モシェ」結成より数日後だが、メンバーたちは刊行前に草稿を読んでた (Zipperstein 1993: 42)。

²⁷ ウスィシュキンはビルーおよびベン・ツィオン結社の創設者。ヘルツルを支持したが、ヘルツルが提案したウガンダへのユダヤ人入植には反対した (Noveck: 317/邦訳: 384 参照)。

²⁸ Zipperstein 1993: 63

²⁹ Zipperstein 1993: 64

³⁰ ユダヤ暦 5651 年は西暦 1891 年のこと。

なのである³¹。アハド・ハアムはブネイ・モシェのメンバーの一人である Y・ラヴニツキー (Yehoshua Rawnitsky, 1859-1944) ³²に次のように語っている。

私は心から思う —— 信じて欲しい —— 読者には良いことだけを伝えたい。でも私にはそれはできない。私の魂がそのようにはさせないのだ (cit. in Zipperstein 1993: 57)。

2. 執筆の背景 — エレツ・イスラエルへの最初の旅

『真実』を書くきっかけとなったエレツ・イスラエルへの最初の視察旅行について、アハド・ハアムは覚書を残しており、その内容を伝記³³のなかでサイモンが伝えている。彼は 1891 年 2 月 14 日 (ユダヤ暦 5651 年アダル 6 日) にオデッサ (オデーサ) から旅立ち、カルメル山³⁴の近くで遭難しそうになりながらも、2 月 26 日 (アダル 18 日) になんとかヤッフア (ヘブライ語読みでは「ヤッフオ」) に到着した。当時、ヤッフアにできたホヴェヴェイ・ツィオンの事務局では、V・ティオムキン (Valdimir Tiomkin, 1861-1927) らのブネイ・モシェのメンバーが指揮をとっていた³⁵。このような寒い時期に、悪天候のなか、アハド・ハアムが急いで旅立ったのは、自分の配下にいるものたちが働くヤッフア事務局内でのトラブルを收拾するためでもあったらしい³⁶。

ヤッフアに着いた時の第一印象を、彼は以下のように書き留めている。

第一印象はあまり良いものではなかった。雨の多い時期で、狭く曲がりくねった街路は、うんざりするほど不潔な状態だった (cit. in: Simon 1960:60)。

その後、アハド・ハアムは 3 月 6 日 (アダル 26 日) に、ヤッフアを旅立ち、リション・レツィオン、ペタ・ティクヴァ等の入植地を回り、そして 3 月 12 日にヤッフアに戻った。入植地の印象は、「非常に憂鬱なものでもあるが、同時に心強く、感動的でもある」(Simon 1960: 60) という実にアンヴィヴァレントなものであった。彼は「ユダヤ人たちが父祖の土地を耕しているところを見

³¹ これを「勇気ある行動」と考えるか、単なる愚かな自虐と考えるか、では意見が分かれるところである。ズィッパースタインは『真実』を「道徳的貢献」として評価しつつも、同時に「自己破壊的で、予想通り賢明でない政治的行動であった」としている (Zippertein 1993: 65)。

³² ラヴニツキーはブネイ・モシェの初期メンバーの一人。編集者、著作家。

³³ Simon, Leon, 1960, *Ahad Ha-am, Asher Ginsberg – a Biography*, London: East and West Library (Simon 1960)。

³⁴ ハイファ地区にある山。

³⁵ 当時のヤッフア事務局の様子については、Zipperstein 1993: 55-56 を参照されたい。ティオムキンのパレスチナでの土地購入計画は失敗に終わっている。『真実』のなかで語られる投機的取引による混乱は、彼の責任でもあるとされている。ティオムキンはのちに修正主義に傾倒する。

³⁶ また当時のヤッフア事務局では、ティオムキンのような世俗派と宗教派の間での摩擦が最高潮に達しており、それもアハド・ハアムの頭を悩ませていた要因であるとズィッパースタインは指摘している。「ブネイ・モシェの宗教者と無宗教者の間の緊張は沸点に達しようとしていた」(Zipperstein 1993: 63-64)。

ることは喜ばしい」(Simon 1960: 60) としながらも、同時に問題が山積しているということも認めざるを得なかったのである。特に、自分がオデッサにいて新聞から入手していた情報が、事実と違っていたということには衝撃を受けたようだ (Simon 1960: 60)。実情が報道によって誇張されたり歪められたりしながら広まっているということについて、アハド・ハアムは以下のように深い憂慮を示している。

(...) しかし、数々の根本的な欠陥に観察者は落胆せずにはいられない。特に、パレスチナの特派員たちによって誇張された情報が外に広がっているのだ、ということについて (cit. in: Simon 1960: 60)。

『真実』の本文中に度々登場するフレーズ, “From abroad, we are accustomed to believing that.... But ...” (「[エレッツ・イスラエルの] ³⁷外にいて、我々は...と信じがちである。しかし...」) という表現には、現実と報道の間のギャップに対する彼の危機感が表れている。

5月17日(イヤール11日)、アハド・ハアムはヤッファを後にし、82日間の視察旅行を終えてオデッサへの帰路についた。最後に彼は、日頃の緊張から暫し解放たれ、幾分、情緒的な言葉を書き残しており³⁸、『真実』における無慈悲なまでに冷静沈着な筆致とは対照的である。

さようなら、さようなら、父祖の土地よ、私の憧れ、私の白日夢よ！さようなら、永遠なる山々、ユダの、エフライムの山々よ、カルメル山とレバノン！私はあなたに再び会えるのだろうか (cit. in Simon 1960: 60)。

また、彼はペサハ(過越祭)の時期にエルサレムのシナゴグを訪ねたときの感動について「人生のうちで稀なほどに神聖な気持ち」(Zipperstein 1993: 57)であったと書き記している(一方で『真実』のなかでは、この同じペサハの様子すら手厳しく揶揄されているのだが)。

「真実の最も醜い面」(TR: 160)を伝える、という使命感とは別に、一人のユダヤ人として、憧れのエレッツ・イスラエルを実際に踏み締めたことへの素直な感動がアハド・ハアムのうちにあったということ、これらの覚書から窺い知ることができるのである。以上のようなことを踏まえて、いよいよ内容の分析に入っていく。

³⁷ From abroad...の訳については、「エレッツ・イスラエル」も「パレスチナ」も国名ではないので、「外国にいて」「国外にいて」等の訳を充てることには抵抗感があつた。従って、ここでは括弧書きで「エレッツ・イスラエル」を補っている。ちなみに I・ハレヴィはこの箇所を “We are accustomed to believe, outside Israel” と訳しており、邦訳も「われわれは、イスラエルの外にいて」となっている (Halevi 1987: 168/邦訳: 281)

³⁸ Simon 1960: 60

Ⅲ.『真実』の全体像

1. 「アラブ問題」は主な関心事ではない？

前述のように、『真実』という論考がこれまで注目されてきた主な理由は、そのなかでの「アラブ問題」への言及にある。英訳を手がけたダウティも、この論考の先駆性および重要性を認めていることが以下の言葉から読み取れる。

(...) 更に特筆すべきは、この論考が、結果的にシオニズムおよびイスラエル国家の歴史を支配することになる「アラブ問題」についての最初の真剣な分析 (the first serious analysis of “the Arab issue”) と見做されてきた、ということである (TR: 154) .

上記のように、彼は『真実』における「アラブ問題」への言及に一定の評価を与えた上で、次のような指摘をしている。

いくつかの瑣末な言及を別とすれば、「エレッツ・イスラエルからの真実」のなかで非ユダヤ系住民との関係について問題にしている段落が二つしかないということは驚きである。『真実』についての真実は、アラブ問題は主な関心事ではなかった、ということなのだ (The truth about “Truth” is that the Arab issue was not a major concern.) (TR: 157, 下線による強調は崎川、以下同様) .

このようなダウティの指摘を受けて、実際にこの論考がどのような構成になっているのか、その中で「アラブ問題」を扱っている箇所がどのくらいあるのか、ということをもまずは数値的に検証してみた。

『真実』の本文は全部で 47 段落からなっており、内容的に「アラブ問題」について言及していると判断できる箇所 (つまり、これまで頻繁に引用されてきた箇所) にあたるのは第 6 段落と第 38 段落の 2 段落だけある。ちなみに (英訳に基づいてのカウントではあるが) 行数で計算してみると、全体が 730 行あるのに対して、二つの段落の行数は第 6 段落が 18 行、第 38 段落が 21 行で合計 39 行、割合にしてたったの 5% にしかない。仮にダウティの言う「いくつかの瑣末な言及」、つまり「アラブ人」について言及してはいるが、「アラブ問題」について扱っているとまでは言えない行を含めても、6 行増え 6% になると言う程度である。本稿の 43, 44 頁の【表 1】は、各段落のテーマと行数をまとめたものである。この表から『真実』の構成を概観できるだろう。

このように単純に数値から判断すれば、この論考に「アラブ問題」が占める割合はほんの僅かであり、ダウティの言うとおりのそれは「主な関心事」ではなく、「アラブ人たちは単に列挙されるべき諸項目の一つに過ぎず、そのなかでも主要なものというわけではない (not the main one at that)」 (TR: 158) という彼の主張には一定の妥当性が認められよう。しかし、それにもかかわらず、これまで読者たちの関心がこの「5%」の部分に集中してきたということは、「主要なもの」であるなしに関わらず、この 2 段落の持つインパクトが決して軽視できないものであるということを物語っている。その点について、詳し

くはダウティの見解の分析と併せて後ほど考えていくとして、まずは残りの95%も含むこの論考の全体像を概観してみたい。その作業を通して「アラブ問題」の位置付けも見えてくるであろう。

前述のように、『真実』は数回に渡って『ハメリッツ』に連載されたものの集合体である。そのため、構成上は一本の論考としての纏まりをやや欠いており、同じ話題が色々な段落に点在していることなどから、要点を把握しにくいという難点がある。以下、その中から重要と思われる視点を、本文からの引用を交えながら、いくつか抜き出して紹介することを試みたい。

2. 「エレッツ・イスラエルからの真実」執筆の狙い — 「最も醜い部分」を明らかにすること

まずは『真実』執筆の動機を本文から読み取っていききたい。前節でも言及したが、ダウティの指摘する通り、この論考は基本的には二年前に書かれた「誤った道」の方向性を引き継いだものであって、その主眼はホヴェヴェイ・ツィオンによる初期入植の方針転換を促すことにある³⁹。ただし、二年前の段階では、彼はまだイスラエルの地を実際に見ていなかったということもあり、「民族感情の再生」といった抽象的な問題に重点が置かれていたのに対して⁴⁰、視察後に書かれた『真実』では、より具体的、現実的な問題に議論が集中しているという点が大きな違いである。『真実』は以下のような文章から始まる。

我々の父祖の土地と、そこでの我々の民 (people) の再生について、長年にわたって熟考し思い描いてきた後に、私はついに私の夢の対象物、あらゆる民、あらゆる国々からの大勢の人々の心を魅了してきた奇跡の土地を、自分自身の目で見るという特権を与えられた (TR: 160)。

しかし、彼を待っていたのは傷心と落胆であった。三ヶ月の滞在で彼が見たものは「その荒廃ぶり、過去の暮らしの残骸、惨めな現状」(TR: 160)であったとアハド・ハアムは言う。今やそれは「もう喜ばしい夢ではなく、むしろ具体的な真実 (truth)」(TR: 160)となったのだ。その真実のなかでも「最も醜い部分」(TR: 160)について明らかにすることによって同胞たちを覚醒させたい、それが彼をこの論考執筆に駆り立てた動機であったと言えるだろう。

私は、楽しい絵への想像力と感情の火を読者たちに点ける「シオンの歌のための堅琴」にはなりたくないのだ。(...) 私の願いは、反対に、我々の仲間、シオンを愛する者たちをその甘いまどろみから目覚めさせ、そして、彼らの前に、一人の目撃者として、この運動の取っている進路の不完全な側面を突きつけること、それによって、現在の活動が我々の望む目的に合っているのかどうかを彼ら自身が判断できるようにすることである (...) (TR: 160-161, 傍点による強調はアハド・ハアム。以下同様)。

³⁹ 「彼の 1891 年の旅の報告は、何よりもまず、二年前に提示された批判を全面的に押し進めたものであった」(TR: 154)。

⁴⁰ 「誤った道」における民族感情の再生の問題については、崎川 2022 で取り上げた。

この引用箇所の中の「シオンを愛する者たち」とは、文字通り「ホヴェヴェイ（愛慕者たち）・ツィオン（シオン）」を指している。このような動機に基づいて書かれたものが、同胞たちから激しい反発を招くことは自明であり、それは既に二年前の「誤った道」のときに実証済みであった。それを承知しながら、彼が強い使命感から執筆を決意したことが、以下の言葉から読み取れる。

ここでの私の言葉が私に敵対する多くの人々を怒らせることはよく分かっているが、しかし真実を公表することは神聖なる任務であると私は考えている（TR: 165）。

3. エレット・イスラエルかアメリカか？ — 「精神的センター論」への伏線

真実の「最も醜い部分」について明らかにする前に、アハド・ハアムはエレット・イスラエルへの入植活動のあるべき姿について持論を展開している。それは〈あるべき姿〉の描写であると同時に、この視察の後に間もなく提示される「精神的センター論」の誕生を示唆する興味深いものである⁴¹。アハド・ハアムは自分の理想とする入植のあり方を所々で提示し、それと現実との乖離を示すという方法で、この入植計画の抱える問題点を巧みに炙り出していくのである。

ユダヤ民族の安住の地としてふさわしいのは「エレット・イスラエルかアメリカか」、という問いに対して、彼はユダヤ人問題の「経済的な側面」（TR: 161）にはアメリカが、そして「理念的な側面」（TR: 161）についてはエレット・イスラエルが応えていくべきである、としている。そして、そのような理念的な「中心地」としてのエレット・イスラエルへの入植は、ユダヤ人たちが自ら「土地を耕す」こと、つまり農業労働に従事することを基本に行われるべきである、とアハド・ハアムは主張する。その主張を以下の箇所から読み取ることができる。

本当の答えは、したがって、アメリカへ、そしてエレット・イスラエルへ、ということになる。ユダヤ人問題の経済的な側面にはアメリカが応える必要がある。一方で、理念的な側面については——我々の同胞たちが一つの大きな集団として一つの場所に、土地を耕すことを基本として入植することによって、我々自身のための確固たる中心地を創りだし、そのことを通して、イスラエル〔の民〕もその敵たちも、民族全体にとっては小さすぎるものの、天の下には一つの場所があるということを、そこではユ

⁴¹ 「精神的センター論」とは、「エレット・イスラエル（パレスチナ）はユダヤ人にとっての〈精神的中心地〉となるべきである」、というアハド・ハアムを代表する考え方。「精神的センター」という概念にアハド・ハアムが初めて言及したのは、この1891年の視察の後、同年12月のピンスケルの死の直後に書かれた追悼文“Even le-matsevah”（“Tombstone” or “Memorial”）のなかでであった（Zipperstein 1993: 77）。ピンスケルの死については Zipperstein 1993: 97 を参照されたい。なお、1892年に描かれた論考“Doktor Pinsker umahbarto”「ピンスケルとその小冊子」のなかでも、「民族精神」のための「確固たる場所」としての「精神的センター」について語られている（SW1: 73）。この論考は独訳（“Dr. Pinsker und seine Broschüre”）で読むことができる（SW1: 64-82）。

ダヤ人たちが、額に汗して働いたお金でパンを買い、そしてその民族の精神を創り出しながら、他の人々と同様に顔を上げていられる、そのような場所があるということを知るようになる必要性については —— もしこのような必要性が満たされる望みがあるとするならば、それはエレッツ・イスラエルにおいてだけであろう (TR:161)。

ユダヤ人が他の民族と同様に、自分たちの労働によって生計をたて、堂々と生きていける場所、たとえ民族全体が移り住むには小さすぎるとも、そのような場所が存在するということは、ひいてはアメリカをはじめ世界の色々な場所に離散しているユダヤ人たちにとっても精神的な拠り所になるであろう。彼はこのような民族の理念的「中心地」をエレッツ・イスラエルに設立することを目標として掲げ、その達成への道のりを「戦い」に、そのための手段を「武器」に例えて、以下のように言及している。

それ[この戦い]は、戦場 (battlefield) の状態や特性についての曇りのない詳細な知識を要する。またそれは将来の行動の全てを前もって描き出すための企画立案全般を必要とする。そして、さらにそれは良い武器 (good weapons) —— とは言っても剣や槍ではなく、強力な意思と全体の統一性 (mighty will and total unity) —— そしてなによりもまず、熟練したリーダーたち (skilled leaders)、適切に訓練され、一般大衆の前を歩き、目標の必要条件を踏まえた上で全ての活動を取りまとめて体系化する意思のある、そして誰もが彼らに付いていくような、そういうリーダーたちを必要とするのだ。このような状況下でのみ、我々は、全ての障害物にもかかわらず、実行可能なことを実行することができ、そして克服することができる。なぜなら一つのまとまった民族の意思と統一性 (the will and unity of an entire people) のまえには、何者も立ちはだかることができないからである (TR: 163)。

数々の障害に抗って入植活動を成功に導くためには、しかるべきリーダーの指揮下、統一性のある秩序だった行動が求められるというのである。この「良きリーダー」、「統一性」の必要性については、この論考のなかで繰り返し言及されているが、これらは「誤った道」のなかでも見られた主張である。また〈優れた指導者〉の存在を重視する傾向は、彼が率いていた精鋭集団「ブネイ・モシェ」の理念と呼応しているという点にも注目すべきであろう⁴²。

しかし、現状はどうだろうか。果たしてその「リーダー」としての役割をホヴェヴェイ・ツィオンは、またヤッフア事務局を取り仕切るブネイ・モシェのメンバーたちは果たしているのだろうか。そのリーダーのもと、「一つのまとまった民族の意思と統一性」は実現されているだろうか。現状をよりよく理解するためには、「エレッツ・イスラエルの目下の状況を、我々の目標と、その道程にある障害の数々との関係において吟味していく必要がある」(TR: 161)とアハド・ハアムは言う。以下、その「障害の数々」がこの後、列挙されていく

⁴² この点について、詳しくは崎川 2022: 14 の註 62 に紹介したズィッパースタインの見解 (Zipperstein 1993: 36) を参照されたい。

のである。

4. 四つの From abroad…（報道と真実の乖離）

アハド・ハアムはエレツ・イスラエルの「外」にいるユダヤ人たちの認識と、実際に自分が目にしたものとの乖離について衝撃を受けた。「[エレツ・イスラエルの]⁴³外にいて、我々は...と思いがちである。しかし、...」という言い回しのもと、この地を踏むことによって明らかになった四つの不都合な〈真実〉が列挙されている。「アラブ問題」についての言及を含む箇所の一つ、第6段落は、この四つのうちの二番目に当たる。それはダウティの言う通り、まさに「列挙されるべき項目のひとつ」(TR: 158)として提示されている。その四つを順に見ていきたい。

① 土地取得の困難

一つ目は土地取得に関する問題である。

[エレツ・イスラエルの] 外にいて、我々はエレツ・イスラエルが現在、全くの荒地で、未開の砂漠で、そして土地を買いだたい者は誰でも欲しいだけ買うことができると信じがちなである。しかし実際はそうではない。この地の全体を見回しても、まだ耕されていない耕作可能な土地を見つけることは難しい (...) (TR: 161)。

このように、良い土地は既に耕されており、また「何の欠点もない土地」(TR: 162)を所有者たちは簡単には手放さないこと、残っている土地は「砂だらけの平地、あるいは石だらけの丘」(TR: 162)であるということがここでは指摘されている。その現実を見れば、好条件の土地を購入することは「外にいて」聞いているよりもずっと困難なのだ、ということである。

② アラブ人

その次に来るのが、本稿の冒頭に掲げた一節を含むアラブ人についての言及、最もよく知られた箇所でもある。大幅に省略されて引用されることも多いが⁴⁴、部分的な読解では伝わらないニュアンスもあるので、ここでは少し長めに引用する。

[エレツ・イスラエルの] 外にいて、我々は、アラブ人たちは皆、砂漠の野蛮人で、ロバのようで、彼らの周りで起こっていることを見てもいなければ理解もしていない、そう信じがちなである。しかしそれは大きな間違いだ。アラブ人は、全てのセムの子孫たちと同様に、鋭い知性を持ち、実に

⁴³ この括弧内の補足については、本稿の註 37 を参照されたい。

⁴⁴ Buber 1993: 13 の編者序（邦訳: x-xi）では独訳が比較的長めに引用されている。なお、独訳と英訳ではニュアンスに若干、違いがある。例えば“like donkeys”（ロバのようで）は、独訳では“auf tierischer Stufe stehen”（動物的な段階にあり）と表現されている。

抜け目ない。シリアとエレッツ・イスラエルはアラブ人の商人たちでいっぱい、彼らはいかにして人々から搾取するかを、またいかにして全ての取引相手との間でコソソリと事を進めるか、ということを知っており、ヨーロッパにおいてと全く同じである。アラブ人たちは、特に街中にいるものたちは、エレッツ・イスラエルでの我々の行動と欲望をよく理解していながら、しかし黙って、何も分かっているふりをしている。なぜなら我々の現在の活動が彼らの将来の脅威にはなるとは思っていないからである。

(...) もしエレッツ・イスラエルにおける我々の暮らしが、先住民たちの暮らしを侵害するようなところまで発展するときが来れば、彼らは簡単には自分たちの場所を空け渡さないだろう (...) (TR: 162)。

アラブ人は「野蛮人」ではなく、自分たちユダヤ人と同じ「セムの子孫」として、同等の知性と欲望を持った存在である、このようなアハド・ハアム指摘は、今日では「当たり前」とも思えるが、残念ながら当時のシオニストたちにとってはそうではなかった。だからこそ 19 世紀末の時点でのこのような発言には大変な重みがある。その点については、後で詳しく論じることとして、先に進もう。

③ トルコ政府

その次に来るのがトルコ政府の問題である。同胞たちのトルコ政府に対する甘い見通しを、アハド・ハアムは次のように戒めている。

[エレッツ・イスラエルの] 外にいて、我々は以下のように信じがちである。トルコ政府は脆弱で無秩序なので、エレッツ・イスラエルで起こっていることには注意を払わないだろう、そして、彼らが金の亡者であるおかげで、我々はここで好き勝手にすることができ、それは我々がヨーロッパからの代理人の庇護下にあるとなれば尚更のことであると。しかしこの点についても、我々は嘆かわしいほどに間違っている (TR: 162)。

トルコ政府がバクシーシュ（賄賂・心付け）で如何様にも操れる、という考えは大いに間違っているというのである。アハド・ハアムは、トルコ人たちが愛国心に満ちており、自分たちの宗教や政府の名誉に関わる問題に対しては、どれだけお金を積まれても妥協することはない誇り高い民族であると認めている (TR: 162)。この見解は実に正しく、実際に 1892 年にはトルコ政府がユダヤ人入植への規制を再び強めていることを考えても⁴⁵、アハド・ハアムの忠告通り、彼らはユダヤ人の言いなりではなかったのである。また、のちの 1896 年にヘルツルがスルタン・アブデュルハミドに対して、パレスチナの対価として 2000 万リラの支払いを提案したとき、その申し出にスルタンが激怒したというエピソードが残されていることから、トルコ政府の誇り高さに関する彼の認識は的確であったと言えるだろう⁴⁶。

⁴⁵ 1892 年のトルコ政府の土地売買規制については Dowty 2021: 169 を参照されたい。

⁴⁶ この件についてのスルタンの返答については、Cohn-Sherbok & Alami : 110-111／邦

トルコ政府は「金の亡者」であるという見方への批判は、アラブ人が「砂漠の野蛮人」であるという偏見に対する指摘と同種のものである。他民族の文化・精神性に対する無理解、敬意の欠如、という共通した問題についての言及として理解してよいだろう。

④ 入植成功の条件

四つ目の From abroad...は、人々の間違った認識を正そうとする他の三つの項目とは少し方向性が違い、いわば〈あるべき姿〉に向かうための条件の提示である。その条件を満たして初めて、入植活動というアイディアは肯定されるということをアハド・ハアムは念押ししている。

〔エレット・イスラエルの〕外にいて、我々はエレット・イスラエルに入植するというアイディアが我々の民 (our people) の心を捉えているのを見て喜んでいる。この喜びは二つの条件が整った時にだけ正当化される (TR: 163)。

ここで言われる「二つの条件」とは、手短かに言うと、1. 入植してくる人々が、「労働の重荷を引き受ける覚悟ができている」(TR: 163) という条件、2. 人々の先頭に立って道を示すことができるリーダーがいること、つまりアハド・ハアムの言葉を借りれば、民族を「悪から、墮落した悪魔から、危険な恋人から守れる」(TR164)、そういう人材がいることである。この二つの条件を示した上で、アハド・ハアムは持ち前の辛辣さを次のように発揮している。

しかしながら、このイスラエルの地でほんの少しの間過ぎして、目をしっかり開けて、ここで起こっていることのすべてを見ええすれば、これら二つの条件がまるっきり欠けている、ということが分かるだろう (TR: 164)。

つまり現実には、覚悟もできていなければ、良きリーダーもいない、そういうことである。

5. 「薔薇色の未来の捏造」、「神の名において」嘘をつくこと、「新しいカリフォルニア」

上記からも分かるように、アハド・ハアムは、誤った認識に基づいて活動を推し進めることを問題視している。そのなかでも特に懸念すべきこととして指摘されているのが、単に無知に起因する事実誤認ではなく、事実とは違う情報が一部の文筆家たちによって「故意に (deliberately)」そして「意図的に (purposefully)」(TR: 164) に流布され、それが結果的に人集めの手段として功を奏してしまうことである。二年前の「誤った道」においても、事実に基づかない「好ましいレポート」(TE: 13) を刊行し、「楽観的な計算」(TE: 13) に基づいて入植者を募ることの危険性が指摘されていた⁴⁷。そのような餌に釣

訳: 9 に詳しい。スルタンはヘルツルに対して「そのようなことはもう一切口にするなと彼に言って欲しい」と怒りを露わにしている。

⁴⁷ この点については崎川 2022: 21 を参照されたい。

られてくる人々は、民族全体のために苦難に耐えるような心構えはないので、期待するような結果がすぐに出なければ投げ出してしまいうに違いないからである。この『真実』になかでは、このような情報操作的な方法論は「薔薇色の未来の捏造」(TR: 164)と呼ばれている。つまり物事を都合よく解釈して根拠のない楽観論を広めることである。しかしなぜホヴェヴェイ・ツィオンも含め、入植活動を主導する人々はそのような方法を取りたがるのか。それをアハド・ハムは以下のように分析している。

彼らは次のように感じている。大衆はシオンへの愛に心を動かされているのではないし、明白な真実 (plain truth) はその心を魅了するには不十分であると。だから彼らは自分たちに以下のことを許している。「神の名において」嘘をつくこと (...) (TR: 164)。

本当のことを知られたら誰も入植には興味を持ってくれない、だから大袈裟に話を盛って人集めをするしかない、ということである。このような考えに基づいて嘘で飾り立てた文書を出版する人々を、彼は「ペテン師」(TR: 164)と呼び、その有害さを批判している。この嘘に惹かれてくる人々は、地道に土地を耕しに来るのではなく、一攫千金を求める「フォーチュンハンター」(TR: 164)であって、聖地は「新しいカリフォルニア」(TR: 164)になるのだ、とアハド・ハムは揶揄している。しかし「嘘」がバレたら、どうなるかは自明である。このような方法によっては、「多くの人々の心に火を灯すこと」(TR: 164)はできても、それは「シオンやイスラエルへの愛に火をつけたのではない」(TR: 164)とアハド・ハムは断言している。

6. 「専門家？」への盲従 — 「模倣の資質」

また、アハド・ハムは、不確かな知識しかないにもかかわらず「専門家」として振る舞う人々がもたらす害悪を指摘している。そのような偽の「専門家」はホヴェヴェイ・ツィオンのメンバーである場合もあれば、「慈善家」つまりはロスチャイルドによってフランスから送り込まれることもある。彼らは実際には何の経験もデータも持っていないのに、人々はその助言を有り難がって鵜呑みにし、結果が何も保証されていないにもかかわらず従ってしまう。その様子をアハド・ハムは以下のように皮肉たっぷりに表現している

これまでの人生で一度たりとも葡萄の木の姿さえ見たことがない人々が、座って専門家のふりをして葡萄畑とワインについて説教をし、正確に簿記をつけ、多額の利益を約束する。そして全ての民がそれを聞いて喜び、賞賛し、そこに「メシアの足跡」を見るのである (TR: 165)。

全ての入植地は、古いものも新しいものも、慈善事業者⁴⁸から送られてきた農業専門家に盲目的に従っている。リション・レツィオン⁴⁹が「バルデ

⁴⁸ ここでの慈善事業者とはロスチャイルドのことである (TR: 180, Notes 23 参照)。

⁴⁹ リション・レツィオン (Rishon LeZion) は「シオン最初の町」の意 (『小百科』: 1114)。

ロ種⁵⁰」の葡萄を植え始めれば、それ以降は民族全体 (entire nation) が「バルデロ種」を植え、リシヨンの経営者が「マルベック種⁵¹」に戻れば、再び民族全体が闇雲に「マルベック種」を探しはじめる、といったことが起こる —— これらのフランスからの客人たちは全て、この聖なる土地で実験をしているだけであって、その結果はまだ不確かなものだと言うことに気づきもせずに (TR: 165)。

しかし、この「専門家」たちによる計算に狂いがあれば、結果はどうなるだろう。果たしてワインには良い値がつくのか、市場は獲得できるのか、そこにアハド・ハアムは疑問を呈している。

したがって国内や地域内で、限られた量しか売れず、そして、もし我々の同志たちが何万本もの葡萄の木を一度に植えたら、このワインの流れはどこに向かって逆流するのか、そしてその価格はどうなるのか (TR: 165)。

これが豊かな投資家の話なら、仮に失敗して損が出たからといってどうということはない。しかし問題は入植者の多くが、ギリギリの状態で、全財産を投じてワイン作りにかけているということである。貧しい人々には移住させなければいいと主張する人々もいるが、長い間、移住の夢に魅了させられてきた彼らを諦めさせるということも現実的ではない。結果的にエレツ・イスラエルは「支援を受けて生活する何千もの新たな貧民、あるいは餓死しそうな人たちで溢れかえるだろう」 (TR: 168)、とアハド・ハアムは予言している。

偽の「専門家」たちによる悪影響を助長するものとして、アハド・ハアムはユダヤ人の「模倣の資質 (the talent for imitation)」を挙げている。つまり、他の人に盲目的に追従する癖である。

イスラエルの民は、その気になれば「知恵があり賢明な民」⁵²でもあり得るのだが —— 以下のことは否定できない —— ある一つの資質が他の民族においてよりも顕著であり⁵³、その特性が彼らの賢さを帳消しにしている。そしてそれは模倣の資質である (TR: 166)。

この資質をアハド・ハアムは「劣った特性 (inferior trait)」 (TR: 166) と断じているのだが、その上で彼は「傑出した知的な人々 (distinguished and intelligent men)」 (TR: 167) によって率いられる場合には、逆にそれが利益をもたらすこともあると言う。優れたリーダーがいれば、彼らに盲従することによって却って良い方向に導かれるからである。彼が繰り返し、良きリーダーの必要性を訴えるのは、このユダヤ民族の〈模倣癖〉も考慮してのことなのであろう。しか

⁵⁰ バルデロ種はイタリア系の葡萄の品種である。

⁵¹ フランス南西部カオール地原産の赤ワイン用黒ブドウ品種。20世紀半ばまで、ボルドーで人気の品種であった。

⁵² 申命記4章6節の「この大いなる国民は確かに知恵があり、賢明な民である」(『新共同訳』より)が念頭に置かれている (TR: 180, Notes 24 参照)。

⁵³ この部分は意識した。直訳すると「この民にはある一つの資質が他のどんな民族によりも引っ付いていて」。

し現実はどうかと言えば、残念ながらそこには良きリーダーも統一性もなく無秩序な状態であり、「模倣の資質」が逆に良い効果を発揮する、というようなことは残念ながら期待できないとアハド・ハアムは嘆いている。

しかし、現状では、[つまり] 何のシステムも秩序も、そして統一性もないような状態では、全ての知識人（そして、しばしば、本物の狂人も）が自分たち自身を小さなメシアであると考え、そしてイスラエルを救うために前に飛び出してくるような、そういうところでは、—— この特性がもたらすダメージは計り知れない（TR: 167）。

民族の〈心臓〉、つまり中心となるシステムを欠いた、このような統一性のない状態を彼は「干からびた四肢の痙攣（a convulsion of withered limbs）」（TR: 164）と呼ぶ。ユダヤ民族全体を一つの身体に例える手法は「誤った道」にも見られるが、このような表現には彼の「社会有機体説」的な思考モデルが反映されており、いかにもアハド・ハアムらしい物言いである⁵⁴。

このように、無秩序の中では「一つの事例、ある一人の〈専門家〉の口からでた〈迷言〉」（TR: 172）が全てを決める土台となりかねず、それにまた「模倣の資質」をもった人々が限りなく後に続く。ワイン作りの問題だけではない。例えば住居の不具合など、生活に関わることがらについても、あるいは土地購入に関する契約や裁判についても、「アラビア語が話せる信頼できる人の一人も知らずに」（TR: 173）、どうやって書類のチェックをできるのか。結局はわからないまま、ただ人の言う通りにするしかない。このように、「そよ風の中を漂う噂」（TR: 173）のような不確かな情報に盲目的に従っていても、物事は良い方に進むはずはない、ということをアハド・ハアムは繰り返しこの論考のなかで主張している。

7. 道徳性の欠如

その他、『真実』のなかでアハド・ハアムが指摘している問題点をここに全て紹介することはできないが、あえて大きく括ってみるとすれば、彼が懸念しているのは入植者たちの〈道徳性の欠如〉であるとも言えるだろう。入植団体の創設者たちは、採算が取れている以上は、そのメンバーたちの「道徳的な質（moral qualities）や肉体労働の能力（capacity for physical labor）についてあまり細かく注意を払っているとは言えない」（TR: 168）、と彼は言う。以下、どのような点において、道徳性が問題とされているのかを見ていきたい。

① 投機家の蔓延による土地価格高騰、仲間うちでの騙し合い

アハド・ハアムが入植活動の障害物として問題視していることの一つに、投機家（土地を切り売りする目的で購入する人々）の蔓延が挙げられる。彼らの

⁵⁴ アハド・ハアムの「社会有機体説」にはユダヤ教の伝統的考え方が反映されていると同時に H・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）の影響も見られる。この点については崎川 2022: 16-17 を参照されたい。

詐欺師まがいの活動が極端な土地価格高騰を誘発し、それが結果的にユダヤ人の仲間内での競争や騙し合い、道徳性の低下をもたらした、ということである。アハド・ハアムは「1 デュナムあたり 20 フラン」であった土地価格が（ただしこれでも「ゾットとするほどの価格（appalling price）」であるとされているのだが）、投機家たちの思惑によってたちまち 50 フランまで釣り上がる様子を具体的に紹介し、彼らのやり口を批判している（TR: 169）。また、ユダヤ人たちの間での土地を巡る駆け引きを「下品で邪悪な競争（vile and vicious competition）」（TR: 168）と呼び、以下のような具体例を挙げて憂いている。

私は一人のヘブライ人の仲介業者からの手紙を見た。彼は傲慢にも仲間の一人に向かって、自分がいかにして、彼に信頼を寄せているある団体の代表が判断を誤るように仕向け、そして彼らが目をつけていた土地を購入することを助ける代わりに、それとは分からないように障害物を仕掛けた、ということを目撃していた（TR: 169）。

土地をめぐる仲間内で騙し合うという、このような嘆かわしい状況について、アハド・ハアムは次のようにも言及している。

イシューヴの運命はこのように人々に委ねられているのだ！最も高尚な理念でさえ、このような手で汚されたら（molested）⁵⁵、品位をすっかり奪われてしまうにちがいない（TR: 170）。

なお、土地価格の高騰に関しては、ホヴェヴェイ・ツィオンのヤッフア事務局で指揮を取るティオムキンをはじめとするブネイ・モシェのメンバーたちにもその責任の一端があると指摘する声もあったという。アハド・ハアムがこの問題について殊更に危機感を持ち、熱く語らなければならなかった背景には、そのような事情もあったということを言い添えておく⁵⁶。

② アラブ人住民への非道徳的態度

ここで紹介するのは、本稿の冒頭に掲げた「アラブ問題」に関する箇所之二つ目、第 38 段落である。前出の第 6 段落と同様に、一部分だけを抜き出して紹介している文献も見られるが、重要な箇所なので本稿では敢えて長めに引用する（以下の翻訳は独訳も参考にしている）。

過去と現在の歴史から学べたはずのことが確かに一つある。それは、我々に敵対する他の人々の怒りを〔我々の〕恥ずべき振る舞いによって挑発しないために、どれほど気をつけなければならないのか、ということである。そして、さらには、我々が新たにそのなかに交じって暮らすことになる異国の人々に対する行動において、愛と尊敬、正義と公正さをもって〔彼らと〕共に歩むために、どれほど注意深くなるべきか、という

⁵⁵ ここで使われている訳語の“molest”は、「性的な悪戯をする、痴漢行為をする」などの非常に下品な意味がある動詞である。

⁵⁶ Zipperstein 1993: 58

ことである。ところで我々の同胞たちはイスラエルの地で何をやっているのか。その全く反対だ。彼らはその離散の地において奴隷であった。そして突然に、自分たちが無制限な自由のなかに、つまりトルコのような国においてしか見出せないような粗野な自由⁵⁷に身をおいていることに気づくのである。この突然の変化は彼らのなかに、「奴隷が王になる」⁵⁸ときにいつもそうであるように、暴政への衝動を生じさせた。そして見よ、彼らは敵意と冷酷さのうちにアラブ人たちと歩み、彼らの権利を不当に侵害し、恥知らずにも正当な理由もなく彼らを叩き、さらに自分たちのしていることを自慢さえしている。そして、この危険で卑劣な衝動を、あえて止めようとするものはいないのだ (TR: 175-176, WP: 267-268)。

長きにわたって離散の民であったユダヤ人は、他の民族と共存していくなかで人々の敵意を誘発しないために十分に気をつけて行動しなければならなかった。そのためには「正義と公正さ」、つまりは道徳的な正しさを失ってはならない。そのことはこれまでの歴史のなかで十分に学べたはずである。しかし、エレツ・イスラエルで彼らがアラブの隣人たちにしていることはその逆であるとアハド・ハムは言う。それはまさに「奴隷が王になる」ときに起こる現象であって、虐げられてきたものが他の誰かを虐げることによって得られる快感なのである。

また、力でアラブ人を振じ伏せることができるかといえ、それも違うとアハド・ハムは主張する。〈強い〉ことと〈横暴〉であることは混同してはならない。相手の行動が正当なものではないと感じれば、アラブ人たちは心に恨みを溜め込むことになるだろう。上の引用に続く以下の箇所には、そのような警告が込められている。

アラブ人は強さと勇敢さを示す人だけを尊敬する、という人々がいるが、彼らは確かに正しい。しかしそれは、彼 [アラブ人] が、相手が正当に振る舞っていると感じているときだけで、相手の行動が暴虐的で不当であるという理由がある場合は別である。そして、仮に彼が自制して、永久に沈黙していたとしても、その心に憤怒が残ри、「復讐し、恨みを抱く」⁵⁹ことに關しては彼の右に出るものはなし、ということになる (TR: 176)。

ここでの考察は本来、ユダヤ人入植者とアラブ人住民との関係についての分析であるが、かつて虐げられたものがまた他の誰かを虐げることで快感を得る、という人間の持つ醜い側面を浮き彫りにしているという意味でも優れた考察である。また、道徳的に正しくない振る舞いは決して尊敬を集めること

⁵⁷ 「トルコのような国においてしか見出せないような粗野な自由」という言い回しのなかに、アハド・ハム自身の中にある（無意識下の？）差別意識を指摘することもできよう。

⁵⁸ 箴言：30 章 22 節「奴隷が王となること、神を知らぬものがパンに飽き足りること」（『新共同訳』より）が念頭に置かれている (TR: 180, Notes, 35 参照)。

⁵⁹ レビ記：19 章 18 節「復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない」（『新共同訳』より）が念頭に置かれている (TR: 181, Notes 36 参照)。

はできないという指摘は、実にシンプルだが、しかし全ての人が心に留めておくべき本質的な教訓でもある。そのようなことを考慮すると、この第 38 段落は、「アラブ問題」についての考察としてのみならず、人間全般の真理に関する分析としても、普遍的で含蓄に富んだ一節であると筆者は考える。

その他にも、農業労働への適性の低さ、忍耐力の欠如 (TR: 174) 等も、ユダヤ人入植者たちのもつ由々しき傾向として挙げられているが、ここでは詳述しない。

8. 現状は「誤った道」である。

これまで概観してきた「真実の最も醜い面」(TR: 160) について、アハド・ハアムは以下のように総括している。

これ以上何を付け加えることができるだろうか。(...) しかし、これまで私がお話ししてきたことはすでに、「これ」が目標の達成に向かうための「道」ではない (This Is Not the Way)⁶⁰、ということを実証するに十分である (TR: 176)。

このような混沌と混乱は、様々な団体がバラバラに行動してきた結果であるとアハド・ハアムは考えている。「ある一つの街からは〈ホヴェヴェイ・ツィオン〉の代表団が、そして別の場所からは〈ドルシェイ・ツィオン〉⁶¹といった具合に」(TR: 170)、それぞれの団体が勝手に行動することにより、利害の衝突や足の引っ張り合いが引き起こされるというのである。すべては「シオン」の名の下に行われているものの、「一つの目的を持って、一心同体となっていくために、互いに助け合い、共に話し合う代わりに、それぞれが別々の道を進んでいる」(TR: 170) とアハド・ハアムは入植者団体を批判している。その上で、「一つの中心から発生し、適切に組織された包括的な事業においては、このようなことはあり得ない」(TR: 170) と主張する。そして「開いた扉は泥棒を招き入れる」(TR: 170) という辛辣な言い回しによって、間違っているのは他の誰でもなく、自分たち自身の無秩序な行動である、ということへの自覚をユダヤ人たちに促しているのである。

このようなことを続けていけば、「ユダヤ (人) 問題 (the Jewish question)」(TR: 176) への答えが見つかるどころか、以前には存在しなかったような「ユダヤ人の問題 (the question of the Jews)」(TR: 176) を、自分たち自身が父祖の土地に付け加えることになる、とアハド・ハアムは懸念を示している。

9. 解決策 — アハド・ハアムの提案

ではこのような「誤った道」から、どのように軌道修正を図ればよいのか。

⁶⁰ “This Is Not the Way” は、最初の論考のタイトル “Lo zeh ha-dereckh” (「誤った道」または「これは道ではない」) を念頭に置いたものである。この論考については本稿の註 20 も参照されたい。

⁶¹ ホヴェヴェイ・ツィオンと同じような団体。「シオンの探求者 (Seeker of Zion)」を意味する (TR: 180, Notes 27 参照)。

ロスチャイルドのような「慈善家」に頼ることをアハド・ハアムは否定している。しかしまた、「東にいる同胞」たちにも、リーダーシップをとるだけの力はないと言う。「結局のところ、今、活動しているのは彼ら〔東欧からのユダヤ人たち〕なのであって、そして彼らが何をどのように行なっているのかは、—— 既に見てきたとおりである」(TR: 176) というのがその理由である。ホヴェヴェイ・ツィオンのヤッフア執行委員会も「全力で」(TR: 176) 秩序をもたらそうと努力している、として彼は一定の評価を与えてもいる。しかしながら、「彼らの物質的、道徳的、そして政治的な状況を考えれば、そのような偉業を成し遂げることはできないだろうし、まして皆を導いていくことなどもっと無理な話である」(TR: 176)、といった具合に、アハド・ハアムは東側のユダヤ人たちによるリーダーシップの可能性を退けている。

それではどうすればよいのか。アハド・ハアムのここでの提案は、西側諸国の啓蒙されたユダヤ人たち、特に英国のユダヤ人たちの手を借りて、「曲がった道をまっすぐに」(イザヤ書 42 章 16 節) することであった。

したがって、あとは西側の同胞たち、特にエレッツ・イスラエルへの入植に対してとてもアクティブな英国に頼るしかない。(…) 彼らは曲がった道をまっすぐにし、問題の全てを正しく見極めることができるかもしれない。これらの、秩序ある生活に慣れていて、近代性とは何かを知っていて、また、必要な手段も持っている人たちは、エレッツ・イスラエルへの入植のための大きな民族的企業 (national company) を設立するだろう (TR: 176-177)。

アハド・ハアムがここで提示した「西側の同胞たち」、つまり英国主導での計画とは以下のようなものである。彼らの設立する「民族的企業」はまず様々な分野の専門家から成る「委員会」(TR: 177) を現地に送り込み、正確な情報収集および実験を行なったのちに土地を購入し、組織的で秩序立った方法で入植を進めていく。入植を希望する人々は、この専門家の指揮下で土地や仕事を充てがわれて働くことができるので、自ら土地獲得のために奔走せずとも、混乱なく安心して移り住むことができる、簡単に言えばこのような計画である。そして手始めに、まだ投機家たちが手をつけていないヨルダン側東岸 (トランスヨルダン) から始めるのがよい、という具体的な提案までなされている。このような方法を取れば、人々は仕事にあぶれることも土地をめぐる争うこともなく、結果的に目下のような不道徳な振る舞いは (仲間内でもアラブ人に対してでも) なくなるだろう、彼のそのような期待が以下の引用箇所から読み取れる。

そして結果的には、10 年、20 年後には、エレッツ・イスラエルには、金目当ての連中 (gold-diggers) と困窮した難民、といった何の役にもたたない人々のゴチャ混ぜではなく、むしろ、平和と秩序のなかで、自分たちの仕事を愛し、自分たちの手で働くことによって生きる、健康的で、善良で、正直な人々が見られるようになるだろう。このような人々は、早々に現地の住民たちの憎しみを掻き立てるようなことはしない。なぜなら彼らは住民たちを挑発しないし、その権利を侵害したりもしないからだ。そのう

ちに、嫉妬が憎しみをもたらすこともあるかもしれないが、それは取るに足らないことである。なぜなら、その頃までには、我々の同胞たちはその数によって、広大で豊かな保有地によって、その統一性によって、そして、その模範的な生き方によって、エレッツ・イスラエルでの地位を確立できているだろうから (TR: 177-178)。

上に見るように、道徳的で「模範的」な生き方を示すことによって、ユダヤ人はエレッツ・イスラエルでの地位を確かなものにすることができる、また現住するアラブ人たちからも一目置かれるようになり、彼らとの関係も解決に向かう、アハド・ハームはそのように考えたのである。

この西側主導の「民族的企業」設立の構想は、英国の A・ゴールドスミッド大佐 (Albert Goldsmid, 1846-1904)⁶² のリーダーシップを念頭に置いたものであった、とサイモンは伝えている (Simon 1960: 64)。アハド・ハームが英国に目を向けた背景には、彼が J・S・ミル (John Stuart Mill, 1806-1873)、H・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) をはじめとするイギリス人の思想家たちから強く影響を受けていたということもあるだろう。アハド・ハームは敬虔なハシディズムの家庭に育ち、伝統的なユダヤ教の知識を完璧に習得していたが、のちにハスカラー (ユダヤ啓蒙主義) およびその他の哲学・社会学的な知識を独学で身につけた。特にスペンサーの影響については、ズィッパースタイン他、多くの研究者が指摘するところである⁶³。

この西側のユダヤ人たちの主導による解決案の是非については、後ほどまた言及する。

10. 「国の破壊」と「民族の破壊」 — それぞれの「証人」

この論考の締めくくりとして、アハド・ハームはペサハの前日に「嘆きの壁」を訪れたときの様子を描写しているが、それは非常に陰鬱なものである。「私の不満と怒りとを木と石との前で、我々のいにしえの栄光の前で、ぶちまけるために私はエルサレムに着いた」(TR: 178) と彼は書いているが、これは本稿の II-2. で紹介した同じペサハの頃に書かれた日記に見られる感動的な言葉とは対照的である。彼はやつれた顔をしたユダヤ人の同胞たちが「風変わりな仕草」(TR: 178) と「奇妙な服装」(TR: 178-179) で大声をあげて祈る様子を「壁」の石と対比させ、以下のように嘆いている。

これらの石は我々の祖国 (our land) の破壊の証人であって、そしてこの人々は、—— 我々の民 (our people) の破壊の証人である。これら二つの〈破壊〉のうち、より悪いのはどちらだろうか。我々がより多くの涙を流

⁶² Simon 1960: 64 を参照されたい。ゴールドスミッド大佐は、キリスト教徒として育ったが、のちにユダヤ民族のために生涯を捧げることを望んだ。彼は J・エリオット (George Eliot, 1819-1880) によるシオニズム的小説の主人公に自分を重ねて、ヘルツルに「私はダニエル・デロンダです」と語っている (Laqueur 1972: 101／邦訳: 149)。

⁶³ スペンサーの影響については、以下を参照されたい。Zipperstein 1993: 35, 36 etc., Klug 2015: xix, Noveck 1963: 32／邦訳: 49。

すのはどちらのためだろうか。祖国が破壊されても、人々は生命と力に満ち溢れたままである。—— ゼルバベル、エズラ、そしてネヘミヤは立ち上がり、そして彼らの後続く人々も、また彼ら自身も戻ってきてそれ「祖国」を再建する。しかし、もしも民が破壊されてしまったら、誰が立ち上がり、どこから助けが来るというのか (TR: 179)。

IV. 『真実』への反響とその影響について

前述のように、『真実』への反応は予想通り厳しいものであった。発表直後から、『ハメリッツ』には様々な反論が飛び交ったが⁶⁴、もっとも衝撃的だったのは、ウスィシュキンからのものだ。彼はブネイ・モシエのメンバーでもあり、また、この視察旅行に同行もしていた。ウスィシュキンもさすがに土地価格の高騰など、自明な事柄については認めざるを得なかったものの、その他の点についてはアハド・ハアムの主張のほぼ全てを退けた。彼の見解によれば、エレッツ・イスラエルの現実とは『真実』のなかの陰気くさい報告とはほとんど関係なく、植民地は繁栄し、ブドウ栽培は模範的な状態で、アラブ人は幸福である、ということになる。どちらが正しいかはともかく、彼の楽観論がアハド・ハアムの辛辣な忠告よりも当時のホヴェヴェイ・ツィオンの雰囲気と調和していたことは言うまでもない⁶⁵。

この論考は結果的にアハド・ハアムがリーダーとして台頭することを阻み、彼を運動の内部で孤立させることになったとダウティは指摘し、また次のように続けている。

『真実』の代償として、彼は自身のアイディアを権力の頂点から (from a pinnacle of power) 実行に移すためのあらゆる機会を失ったのかもしれない (TR: 156)。

この点についてはズィッパースタインが説得力を持って指摘しているということを示すためにダウティは註に記しているが、そのズィッパースタインは『真実』の執筆について、「間違いなく相当な道徳的貢献であったが、同時に自己破壊的で、予想通り賢明でない政治的行動であった」(Zipperstein 1993: 65) と手厳しく批評している。

『真実』の出版以前にはユダヤ民族主義者たちはアハド・ハアム派とリリエンブルム派に二分されていたが⁶⁶、出版後は皆が一丸となって「お騒がせもののブネイ・モシエのリーダー」(Zipperstein 1993: 64)、つまりアハド・ハアムに敵対するようになったという。1880年代の初めにユダヤ民族主義が始まって以降、人々はしかるべき指導者を探し求めている。当初はアハド・ハアムがその指導者であるかのように見えていたが、それも束の間であった。『真実』

⁶⁴ TR: 155

⁶⁵ ウスィシュキンの反応については Zipperstein 1993: 63 を参照した。

⁶⁶ Zipperstein 1993: 64. リリエンブルム (Moses Leib Lilienblum, 1843-1910) はピンスケルと並ぶヒバット (ホヴェヴェイ)・ツィオンの中心的指導者。「民族感情」を巡っての彼とアハド・ハアムとの論争については崎川 2022: 23-31 で取り上げた。

の出版後も彼は優れた文筆家であり、鋭い思想家であることに変わりはないものの、その求心力は確実に失われたのである。『真実』の影響をズィッパースタインは次のような言葉で結論づけている。

しかしながら、それ以前は、人々は彼の中に、彼の掲げる旗を中心として運動を統合してくれる指導者を見出したかのように思っていたのであった。しかし、もはやそのようなことはありえなかった（Zipperstein 1993: 63）

また、西欧のユダヤ人の力を借りるという彼のアイディアは、—— 同様の案はのちにヘルツルによっても提示されるのであるが —— この時点ではなんの反応も引き起こさなかったし、このプランを実行に移すことに伴う困難について、アハド・ハアム自身も熟慮していたのかどうかは疑わしい、と側近のサイモンが語っている（Simon 1960: 64）。「最も批判的でない伝記作家」⁶⁷にして信奉者である彼でさえ、この提案に対しては幾分手厳しい評価を残しているのである。アハド・ハアムは西欧のユダヤ人へのヒバット・ツィオンの影響力を過大評価していたし、このような方法では東側のユダヤ人たちの努力は報われず、彼らの不満が噴出することで政治的な難しさにも発展しただろう、とサイモンは言う（Simon 1960: 65）。また、のちのヘルツルによる「シオニスト機構」設立がうまくいったのは、西欧で生まれ育ったというその生い立ちがあつてのことだ、という彼の指摘もまた的確なものである⁶⁸。

＊

このように、当時の『真実』への反応は大変ネガティブなものであつて、政治的には〈失敗〉だったと言える。それによって、アハド・ハアム自身もまた、政治的権力への関心を失っていったという⁶⁹。しかしサイモンは以下のようにも言及している。

この記事が怒りと抗議の大嵐を巻き起こしたのは、一部の人々が、それに気づいていながら、大衆に広く知られないように全力を尽くして隠してきた事実を、無慈悲なまでに暴き出したからである（Simon 1960: 61）。

この指摘のとおり、同胞たちからの過剰なまでの抗議は、人々が（少なくとも一部のメンバーが）気づいていながらひた隠しにしていた多くの不都合な〈真実〉がそこに暴かれていたから、つまりアハド・ハアムの指摘はある意味

⁶⁷ ズィッパースタインはサイモンのことをこのように評している（Zipperstein 1993: 38）。

⁶⁸ この西側主導の計画について、サイモンは以下のようにも分析している。「アハド・ハアム自身も心の奥底で、西側のリーダーシップに頼ることはヒバット・ツィオンが行き当たった袋小路から脱する道にはならないであろうことは分かっていたかもしれない」（Simon 1960: 66）。

⁶⁹ Zipperstein 1993: 66

〈図星〉であったからであるとも考えられるだろう。なかでもダウティが「主な関心事ではない」と評した「アラブ問題」についての鋭い考察は今日でも注目され続けており、その影響力は決して小さくはないのである。以下、改めてこの「アラブ問題」について、ダウティの見解に依拠しながら、また W・ラカー等による客観的な考察の助けも適宜、借りながら見ていきたい。

V. 『真実』におけるアラブ問題とは？ — ダウティの見解

1. 肯定的評価 — 「5%」のもつ意義

以上、『真実』の全体を概観するなかで、この論考において「アラブ問題」は数ある課題のうちの一つに過ぎないということは確認できた。また数値的な分析からも、アラブ人に関する記述は全体のうちの極わずかであるということを見えてきた。その上で、改めてこの論考における「アラブ問題」への言及が持つ意義について考えていきたい。まず、ダウティの次の言葉を以下に引用する。

この論考は、アラブ人住民との関係がシオニズムにとって最も厳しい試験の一つとなるであろうことについての、少なくとも微かな認識をともなった、最初の、そしてしばらくの間は唯一の、真剣な論評であった (TR: 156)。

上に見るように、『真実』は「アラブ問題」についての「最初の、そしてしばらくの間は唯一の (as the first, and for some time as the only)」真剣な分析であったがゆえに注目されてきたとダウティは評価している。これはつまりアハド・ハアムの「最初」の指摘以降、「しばらくの間」はだれもこの問題に真剣に向き合ってはこなかった、ということの意味する。

ダウティが指摘する通り、アラブ人住民との対立が孕む危険性がユダヤ人側から本格的に認識されるようになるのは、『真実』が書かれた 1891 年よりもずっと後のことであった。「事実、アハド・ハアムの見識は、いくつかの点において、実際にアラブ人たちと接していた初期入植者たちの見識と態度を遥かに超えていた」(TR: 157) と彼は言う。第一次アリヤー (1882 年から 1905 年頃の入植活動とダウティは定義) の頃の開拓者たちの日記や手紙も研究対象としているダウティによれば⁷⁰、彼らはアラブ人住民たちに「驚くほど僅かな関心」(TR: 157) しか示しておらず、アラブの隣人たちとの揉め事は、アラブ人同士の間での衝突と同様に、政治的な意味を持つものではない、と考えられていたらしい⁷¹。

しかし、この問題について、例えばアラブ人 (パレスチナ人) 研究者である D・アラミー (Dawoud El-Alami, 1953 -) は、19 世紀後半に始まったユダヤ人による入植の活発化に起因する民衆レベルの最初の騒乱が 1891 年 (『真実』が書かれた年) に既に見られたこと、それによってエルサレムに住む「名望家の

⁷⁰ TR: 180, Notes 16

⁷¹ TR: 157

代表」がコンスタンチノーブルに書簡を送り、ユダヤ人の移民と土地購入の制限をスルタンに要請していたことを伝えている⁷²。

パレスチナ人農民とユダヤ人入植者のあいだで、民衆レベルの騒乱が初めて起きたのは一八九一年六月のことだった (Cohn-Sherbok & Alami: 110 / 邦訳 : 8)。

このとき、エルサレムに住むいくつかの名望家の代表がコンスタンチノーブルに書簡を送り、パレスチナへのユダヤ人移民の数に関して懸念を表明し、移民と土地購入を制限するようスルタンに要請した (Cohn-Sherbok & Alami: 110 / 邦訳 : 8)。

このように、アラブ人側から見れば、両民族間の確執は、この『真実』の描かれたのと同じ年に、既に立派な〈政治的な問題〉に発展する兆しをみせていたのである。

アラブ人住民と自分達との間にある確執から目を背けようとする当時のユダヤ人入植者たちの態度の背景には、イデオロギー上の重要な問題があったとダウティは指摘している。自分たちに敵意を持つ住民の間に身を置いているということを認めることは、「エレッツ・イスラエルでのシオニズムは単にディアスポラにおける基本的な問題を繰り返しているだけ」(TR: 158)である、と認めることにもなる。「アラブ人たちは自分達を敬い、平和なままにしておいてくれる」(TR: 158)、と主張することで、アラブ人たちの敵意は「都合よく絨毯の下に掃き入れられた」(TR: 158)とダウティは分析している。「その絨毯の下を覗いて見たい衝動に駆られたのがアハド・ハアムだった」(TR: 158)というわけである。

アラブ人に対するアハド・ハアムの認識について、ダウティは次のように評価している。

1891年にアハド・ハアムは他の人が見ている以上のものを見ていた。彼はアラブ人を単に他人から操られるだけの受け身な対象物とは見ておらず、自らの欲望と目標を持った行動主体であると考えていた (TR: 157)。

前節でも述べたが、アラブ人は「野蛮人」ではなく、自分たちと同じ「セム人」として知性も欲望もある。こんな自明のことが当時のシオニストたちには「自明」とはされていなかった。よく引き合いに出される「民なき土地に土地なき民を」⁷³というスローガンからもわかるように、パレスチナを〈無人の地〉と考えることは、ユダヤ人の〈シオンへの帰還〉を正当化するための理屈とし

⁷² なお、ラカーも同様の指摘をしている。「早くも一八九一年にアラブ人名士のあるグループは、五〇〇人の賛同者の署名を得た嘆願書をエルサレムからコンスタンチノーブルへ送り、ユダヤ人がアラブ人からすべての土地を奪い、商業を横取りしようとしており、武器をこの地に持ち込んでいる、と苦情を述べていた。」(Laqueur 1972: 212 / 邦訳 306)。

⁷³ イギリス系ユダヤ人の I・ザンクヴィル (Israel Zangwill, 1864-1926) が提唱したとされるこのスローガンについては、白杵 2009 : 43 頁を参照されたい。

て横行していたし、仮に彼らの存在に気づいたとしても、見えないふりをする、あるいは彼らを人と見做さずに「砂や椰子の木や駱駝」⁷⁴のように扱っていたということは、この五年後に登場する T・ヘルツル (Theodor Herzl, 1869-1904) に関する記述のなかでも確認できる⁷⁵。このような認識を持ったユダヤ人が大半である中で、このアハド・ハアムの発言はおそらく唐突な印象をもって受け止められたはずであるし、かなりの反発を呼んだであろうことは想像に難くない。事実、その他全ての忠告とともに、この彼の指摘は無視され続けたのである。

アハド・ハアムの後にこの問題を取り上げた人物として、ダウティはウシシュキン、L・モツキン (Leo Motzkin, 1867-1933)、B・ボロホフ (Ber Borochov, 1881-1917)、そして前述のヘルツルの名を挙げ、そのいずれもがこの問題を「はるか先の脅威」(TR: 156) として過小評価し、またシオニズムによってもたらされる「近代的で民主的な社会」にアラブ人たちを吸収・統合することによってこの問題は解決できる、という楽観的な見通しを持っていたとしている (TR: 156)。事実、ウシシュキンは『真実』を批判する記事の中で、アラブ人は平和に暮らしており、ユダヤ人よりもむしろキリスト教徒を恐れている、と主張しているし⁷⁶、モツキンは、土地を売った代金があればアラブ人たちが進んで、平和的にパレスチナの外に移住するだろうと主張した⁷⁷。マルクス主義シオニズムの理論家であるボロホフも、パレスチナ・アラブ人は文化的に吸収されうると考えていた⁷⁸。

なかでも特筆すべきは、アハド・ハアム最大の論敵であったヘルツルである。アラブ人住民の存在を軽視、あるいは無視してきたことで、今日では度々批判される彼は (詳しくは本稿の註 75, 76 を参照されたい)、1902 年に執筆したユートピア小説『古くて新しい国 (Altneuland)』⁷⁹の中で、レシッド・ベイ (Reschid Bey) という登場人物にアラブ人を代表させて、この人物を通して「おめでたい」とも言えるほどの楽観的な見通しを示した。レシッドの口からは、ユダヤ人入植者に対する好意的な言葉が次々と繰り出してくる。「ユダヤ人は何も奪わず、代わりに多くのものを与えてくれた」⁸⁰、と彼は言うのである。また、「あなたはユダヤ人たちが侵入者だとは思わないのか」と言う問いにレシッドは親しみをこめて以下のように答える。

⁷⁴ 「1899 年にヘルツルはユダヤ人の居留地を「オアシス」と呼び、大勢のパレスチナ人を砂や木やラクダと同じように扱った」(Halevi 1987: 173/邦訳: 290)。

⁷⁵ 「彼はパレスチナを訪問しても、そこに同胞のユダヤ人以外に誰も見出さないようである。アラブ人は、彼らのアラビアンナイトの物語のように、ヘルツルの前から消え去っているかのようだ」(Jeffries 1939: 40, 訳文は Laqueur 1972/邦訳: 303 にあるものを一部改変)。なお、ジェフリーズはこの書籍の中で、ヘルツルにアハド・ハアムを対比させている。アハド・ハアムについての彼の評価については、Jeffries 1939: 42-43 を参照されたい。

⁷⁶ Zipperstein 1993: 63

⁷⁷ Laqueur 1972: 231/邦訳: 333

⁷⁸ ラカーによれば、ボロコフはこの発想を、預言者の人物のミハエル・ハルンペンから得ていた可能性があるらしい (Laqueur 1972: 241/邦訳: 871-872 の原注 6 参照)。

⁷⁹ Herzl 1985: 17-161

⁸⁰ Herzl 1985: 88

何も奪わず、代わりに何かを持ってきてくれる人をあなたは泥棒と呼ぶのですか。ユダヤ人たちは我々を豊かにしてくれました。なぜ私たちは彼らに対して怒らなければならないのでしょうか。彼らは兄弟のように私たちとともに暮らしています。なぜ彼らを愛してはいけないのですか (Herzl 1985: 88)。

この小説に対して、アハド・ハアムは早速、同じ「古くて新しい国」⁸¹というタイトルのもとで批判的な論考を執筆した。ヘルツルの楽観論に対してアハド・ハアムは、「まことに、なんと優美で牧歌的なことだろう！」(SW2: 61)と揶揄している。世界中からユダヤ人たちが押し寄せてくるのに、これまでパレスチナの土地の大部分を耕してきたアラブ人たちの土地が奪われないで済む、などと言うことはありえない、というのが、彼の反論の主旨である⁸²。

ダウティによれば、『真実』以降の「アラブ問題」についての本格的な議論は、ブネイ・モシェ初期メンバー⁸³の一人である Y・エプシュタイン (Yitshak Epstein) による 1907 年の論考「隠された問い (“The Hidden Question”)」⁸⁴によって、やっと始まったのだという。ダウティが指摘しているように⁸⁵、その一年後の 1908 年には青年トルコ派による革命がおこり⁸⁶、アラブ・ナショナリズムの台頭が意識されるようになってきていたことを考慮すると、この頃にはアハド・ハアムが『真実』を執筆した 1891 年よりは両民族間の確執がかなり可視化されてきていたであろう。しかしこのエプシュタインの論考以前には、アハド・ハアムの警告は全く省みられることがなかったのだ。

ちなみに詳細なシオニズム研究で知られる W・ラカー (Walter Zeev Laqueur, 1921-2018) によれば、シオニストたちのうちの多くがユダヤ人入植者とアラブ人住民の関係の深刻さに気づいたのは 1920 年 (エルサレム)、21 年 (ガリ

⁸¹ SW2: 47-70, “Altneuland”. 初出はアハド・ハアムが編集に携わっていたヘブライ語月刊誌『ハシロア』で、1902 年である。翌年の 1903 年に独訳が Ost und West 社から刊行された。ヘルツルの『古くて新しい国』については、Laqueur 1972: 210-211/邦訳 304-5 にも詳しい。

⁸² SW2: 61

⁸³ ブネイ・モシェの創設時のメンバーは 8 名、もしくは 9 名であったと言われている。エプシュタインはそのうちの一人である。「9 人目」としてリリエンブルムが入っていた可能性についてズィッパースタインは言及している (Zipperstein 1993: 43)。

⁸⁴ 「隠された問い」は、A・シャッツ編集の論文集に収録されている (本稿の文献表を参照されたい)。この論考は、1905 年に開催された第 7 回シオニスト会議の際の非公開の会合でのエプシュタインの発言をもとに書かれたものである。この講演についてはラカーが詳しく伝えている (Laqueur 1972: 215ff./邦訳: 311ff.)。エプシュタインは、アラブ問題はシオニズムが直面しているすべての問題の中で最も重要であり、しかも、この問題は「無視されてきた」というより「隠されてきた」と主張した。また誇り高く独立心の強いアラブ人の憎しみを買えば危険な結果を招く、シオニストは征服者であるべきではない、との見解を示した。エプシュタインについては H・アーレントも「アラブ問題」に関連する自身の論文のなかで言及している (Arendt 1950: 65)。

⁸⁵ TR: 159

⁸⁶ Laqueur 1972: 214/邦訳: 309-310。

ラヤ地方)の暴動以降だということである⁸⁷。また彼は「戦前のシオニスト文献を眺めても、アラブ人についてはほとんど一言も見出さないであろう」

(Laqueur 1972: 210／邦訳: 303) という 1931 年の H・ヴァイツマン⁸⁸ (Chaim Weizmann, 1874-1952) の発言を引き合いに出し、「これは、シオニスト指導者はアラブ人の存在に半ば気づいていたが、自分に都合のいい理由からアラブ人は存在しないかのように行動していたことを意味した」と言及しているが、つまり「アラブ問題」から目を逸らそうとする傾向はエプシュタインによる指摘があった後も長く続いたということである。以上のようなことを踏まえると、シオニズム最初期、つまり第一次アリヤーの時期に既に「アラブ問題」に目を向けていたアハド・ハアムは非常に先駆的であったということになる⁸⁹。『真実』という論考の存在は、多くのシオニストたちがこの問題について「知らなかった」のではなく、(後にアハド・ハアム自身が 1920 年に書いた「バルフォア宣言の後で」という論考で言及しているように) 活動の最初期から知っていながら「無視してきた」⁹⁰ということを示しているのである。そのことをダウティは以下のように的確に言い表している。

1891 年のアハド・ハアムの警告は、第一次アリヤー (1882-1905 年の間の最初の入植者の波) のころのシオニストたちはこの問題に注目してはいなかったかもしれないが、彼らは少なくとも気づいてはいた、ということの証拠となる (TR: 156-157) 。

まさにこの「証拠」として、『真実』は重要な意味を持っていると言えるだろう。

⁸⁷ 20 年、21 年の暴動については、Laqueur 1972: 209／邦訳: 302 を参照されたい。また、「アラブ問題」がこの頃にはじめて顕在化してきたという点については鶴見太郎が次のように言及している。「一九一〇年代まで、パレスチナに暮らすアラブ人の存在は、無視されていたわけではないにしても、シオニズム遂行に際して大きな障壁になるとされることは、一部の例外的議論 (例えばアハド・ハアムが一九一二年に、シオニストの高慢な態度やアラブ人が黙っているのは今のうちだけである旨警告した「エレット・イスラエルからの真実」) を除いてはあまりなく、おおむね楽観視されていた。(…) シオニズム全体で「アラブ問題」が本格的に議論されるようになるには、一九二〇年に本格的なアラブ人の反シオニズム暴動が起こるのを待たなければならなかった」(鶴見 2012: 328)。ただし、この引用箇所の中の「一九一二年」は、明らかに「一八九一年」の誤りであろう。『真実』が 1912 年に書かれたのであれば、エプシュタインの「隠された問い」よりも後、ということになり、その位置付けは全く別のものになってしまう。

⁸⁸ (説明するまでもないが) ヴァイツマンは「バルフォア宣言」へ向けての交渉の中心人物、およびイスラエル初代大統領である。

⁸⁹ アハド・ハアムは 1910 年の Ben-Hillel Ha-Cohen 宛の書簡の中で、自分が既に 20 年前に、アラブ人との衝突が勃発するであろうことについて『真実』のなかではっきりと指摘したこと、それが予想以上に早く的中したということについて書いている。

⁹⁰ 「バルフォア宣言の後で」のなかで、アハド・ハアムはパレスチナに現住するアラブ人の存在をシオニストたちが「無視し続けてきた」と書いている (NJ: 162)。この論考については、本稿の VI で後述する。

2. 否定的評価 — ダウティのアハド・ハアム批判

これまで見てきたように、ダウティは「アラブ問題」についてのアハド・ハアムの考察の重要性を認めたうえで、否定的な評価も下している。彼が「アラブ問題」を『真実』の主な関心事ではない、と主張する理由は単純にその分量や比率にだけあるのではなく、内容からの判断でもあるのだ。

彼が注目している点のひとつに、このテーマの継続性が挙げられる⁹¹。この論考の執筆後、長期にわたって、アハド・ハアムはこの問題について論じていない、ということ、またこの論考を批判した人々との論争においても「アラブ問題」は主な争点ではなかった、ということをダウティは重視している。1893年に書かれた「第二部」でも、「アラブ問題」は取り上げられなかった。1911年のパレスチナ再訪の後までは、前述のヘルツルの『古くて新しい国』を酷評した書評のなかでの言及を除いては、彼が本格的このテーマに立ち返ることはなかったのである（TR: 157）。つまり二十年もの間、ほぼ沈黙していたということになる。それは即ち、アハド・ハアムのなかでこの問題の優先順位が高くはなかった、ということを示しているとダウティは判断したのであろう。

また、ダウティは『真実』におけるアハド・ハアムの先見性を認めつつも、当時の彼が事の重大さを本質的に理解していたとは言い難いとしている。

(...) アハド・ハアムにとってアラブ人たちは、他の人々が気づいていないような集団的利害意識を持ってはいても、まだ政治的な問題を引き起こすものではなかった（TR: 158, 傍点による強調はダウティ）。

本稿のⅢ-7で引用した『真実』の第38段落に見るように、確かにアハド・ハアムはユダヤ人によるアラブ人への不当な扱いを、民族の離散の歴史と関連づけながら道徳的な観点から厳しく糾弾した。「自分たちに対立する他の人々の怒りを、恥ずべき行動によって誘発しないために、我々がどれだけ気をつけなければならないのか」（TR: 175）ということをして「過去と現在の歴史」（TR: 175）から学ぶように、同胞たちを促している。しかし、ダウティに言わせれば、この時点でのアハド・ハアムはこの問題の真の深刻さや政治的な意味を理解していたわけではない。このような忠告も「何らかの相互の調整をしよう」（TR: 159）ということではなく、「最終的な目標達成の障害となるものを減らすための戦略全般のうちの一部分にすぎない」（TR: 159）と彼は手厳しく批評している。またダウティは次のようにも言及している。

アハド・ハアムは目の前にある問題について、単純に、先住する人々に対しての礼儀正しく人間的な振る舞い、と言う観点から見ていた（TR: 158）。

当時のアハド・ハアムにとって、アラブ人住民たちとの間の問題は単に〈礼儀正しさ〉の次元の話として捉えられており、それ以上の深刻な事態を誘発するようなものとは考えられていなかった、ということであろうか。加えてダウティは、このような「礼儀正しさ」によってだけではアラブ人たちの敵意を押

⁹¹ この点についてはゾィッパースタインも指摘している（Zipperstein 1993: 201）。

さえ込むことはできない、ということをアハド・ハアムは分かったうえで、〈それでよい〉と考えていたと分析しているようである。たしかにアハド・ハアムは、「10年、20年後に」(TR: 177) 自分たちが成功したあとには「嫉妬が憎しみをもたらすこともあるかもしれない」(TR: 178) としながらも、それが道徳的に正しい方法で成し遂げられたのであれば、いくらアラブ人たちが敵意を溜め込もうとも「それは取るに足らないことである (this is nothing)」(TR: 178) と言及しており、その言葉にダウティは着目している。彼が引用している以下の箇所からは、お気に入りの「統一性と模範的な生き方」を万能薬と考えるアハド・ハアムのある種の見通しの甘さ、またアラブ人への配慮の希薄さが透けて見える。

そのうちに、嫉妬が憎しみをもたらすこともあるかもしれないが、それは取るに足らないことである。その頃までには、我々の同胞たちはその数によって、その広大で豊かな保有地によって、その統一性と模範的な生き方によって、イスラエルの地での自分たちの地位を確立することができているであろう (TR: 178)。

この箇所から判断するに、一旦、「数」と「豊かな保有地」を確保してしまえば、つまり成功すれば、あとは何を言われようと構わない、全てはその成功のための〈礼儀正しさ〉だ、と言っているようにも思えなくはない。アラブ人への道徳的配慮すらも「戦略全般のうちの一部分にすぎない」というダウティの主張は、このようなことを考慮しての判断であろう。

最後にもう一点、ダウティは次のような指摘をしている。

アラブ人を非ヨーロッパ的で遅れた人々としてみるアハド・ハアムの態度には、ヨーロッパ文化・制度の優位性が当然のことと考えられていたころの初期シオニストたちと彼との間に大きな隔たりはなかった、ということが現れている (TR: 159)。

『真実』の第一段落目で、確かにアハド・ハアムが以下のように「口を滑らせている」(TR: 159) 箇所があるのを彼は目敏く指摘している。

その丘や、その田畑、そしてアラブ人の怠慢にもかかわらず、実を实らせている葡萄園 (...) (TR: 160)

また、最終的に『真実』のなかで彼が提示した解決策も、結局は西欧の啓蒙された文化の導入であったことから、ダウティの言う通り、「ヨーロッパ文化の優位性」を彼が認めていたということは否定できない。このような西洋至上主義的な観点からアラブ人を見下す傾向がアハド・ハアムにもあったとすれば、この頃のアハド・ハアムは、確かにまだアラブ人との相互理解の必要性を本当に感じていたのではなく、彼らとの確執を「乗り越えられるはずの障害物の一つに過ぎない」と考えていた、というダウティの見解には一定の妥当性があると言えるだろう。

『真実』におけるアハド・ハアムの「アラブ問題」への言及を過大評価すべ

きではない、という点についてはズィッパースタインも同様の指摘をしている⁹²。彼がアラブ人の人権についてより明確な問題意識と危機感を持つようになるのは、もう少し後のことである。しかし、まだ認識が甘かったにせよ、この19世紀末に、少なくともアハド・ハアムが他の人々が全く見ようとしなかったものに目を向けたことは事実であり、この論考での考察が彼自身のその後の「アラブ問題」観にも、またのちにこの問題に目を向けた人々にも影響を与えていることは間違いないだろう。以下、晩年の論考「バルフォア宣言の後で（“After the Balfour Declaration”）」における「アラブ問題」への取り組みについても簡単に紹介しながら、アハド・ハアムがのちのバイナショナリズム（二民族一国家主義）運動に与えた影響についても考えてみたい。

VI. 晩年の論考における「アラブ問題」への言及 — バイナショナリズムへ

1. 「バルフォア宣言の後で」における「アラブ問題」観

『真実』が発表されてから三十年後の1920年に、アハド・ハアムの論考集『岐路にて（*Al Parashat Drakhim*）』⁹³の新版が刊行された。論考「バルフォア宣言の後で」⁹⁴は、その前書きとして書かれたものである。この論考のなかでアハド・ハアムは、アラブ人への人権侵害の問題に対して、『真実』においてよりも態度を明確にしている（以下、サイモンによる本論考の英訳に従って、「エレット・イスラエル」の代わりに「パレスチナ」という呼称を使用する）。

ここでの彼の主張は簡単に言えば以下のようなものである。「バルフォア宣言」は決してパレスチナ（エレット・イスラエル）をユダヤ人だけの「民族的郷土（National Home）」にすることを約束するものではなく、同時に現住するアラブ人たちの権利をも保証するものである、またそれは「宣言」を注意深く読めば分かることで、都合の良いように拡大解釈すべきではない。

アハド・ハアムは、「バルフォア宣言」に向けての交渉にあたったヴァイツマンの相談役でもあり⁹⁵、また英国政府の密使である M・サイクス卿（Mark Sykes, 1879-1919）との会議⁹⁶に自らも加わっていたため、交渉の過程を熟知していた。彼は「宣言」のなかの「パレスチナにユダヤ人のための民族的郷土を

⁹² Zipperstein 1993: 201

⁹³ 英訳は *At the Crossroads*, または *At the Parting of the Way*, 独訳は *Am Scheidewege* が充てられる。

⁹⁴ この論考の英訳、即ち“After the Balfour Declaration”は、H・コーン編集の論考集 *Nationalism and The Jewish Ethic*（本稿では NJ と略記）：155-164、および B・クラッグ編集の *WORDS OF FIRE-Selected Essays of Ahad Ha'am*（Klug 2015）：138-148 に収録されている。双方とも翻訳はサイモンによるものである。本稿では前者を用いる。

⁹⁵ Kohn 1962: 28、および Noveck 1963: 28-29／邦訳：45-46 を参照されたい。「バルフォア宣言」が発せられたときに、ヴァイツマンはそれが世界に発表される前に夜中にアハド・ハアムの家を訪ねて真っ先に彼に示した、というエピソードが残されている（Noveck 1963: 29／邦訳：46）。

⁹⁶ この会議にはアハド・ハアムとヴァイツマン以外にも、ロスチャイルド卿（Baron Edmond de Rothschild, 1845-1934）、N・ソコロフ（Nahum Sokolow, 1859-1936）、H・サミュエル（Herbert Samuel, 1870-1963）らが加わっていた（Noveck 1963: 29／邦訳：46）。

設立する (the establishment in Palestine of a national home for the Jewish people)」いう文言に注目している⁹⁷。この部分がシオニスト側から提示された案である「パレスチナをユダヤ人の民族的郷土として再建する (the reconstitution of Palestine as the National Home of the Jewish people)」(NJ: 158) から書き換えられたものであることを指摘し⁹⁸、二つの表現の違いから英国側の意図を正確に読み取るべきである、と注意喚起しているのである。

英国政府による書き換えには、シオニスト側の案をそのまま適用すればユダヤ人の権利を過剰に認めることになるのではないか、ということへの懸念が反映されているとアハド・ハアムは分析している。つまり、ユダヤ人が「全ての事柄を自分たちのやり方で、現在の住人たちが同意しようがしまいがお構いなしに運営する」(NJ: 159) ための権利を保証されたと解釈するのではないか、ということである。この書き換えについて、アハド・ハアムは以下のよう

しかし、英国政府は、宣言自体において明示されているように、パレスチナの現在の住民を害するようなことは約束したくないと考え、だからこそシオニストによる原案を変更し、より限定された形にしたのである (NJ: 159)。

英国政府が書き換えを行なった理由について、さらに彼は次のように続ける。

英国政府が —— 提案されたように、パレスチナをユダヤ人の民族的郷土として再建するのではなくて —— パレスチナにユダヤ人のための民族的郷土を建設することを援助すると約束したということは、二つのことを意味していた。それは、第一に、英国政府の援助を約束した上で、パレスチナに民族の本拠地を建設するユダヤ人の歴史的権利を認めること、第二に、その権利が現在の住民の権利を覆して、ユダヤ人をこの国の唯一の支配者とする力を否定することである (NJ: 160-161)。

ここで指摘されている「第一」の点、つまりはユダヤ人にはパレスチナに民族的郷土を建設するための〈権利〉があるということはアハド・ハアムも認めている。その権利を彼は「歴史的権利 (historical right)」と呼ぶ。しかし同時に「第二」の点、つまり「現在の住民の権利を覆して、ユダヤ人をこの国の唯一の支配者とする力」が、宣言によって否定されているという点も直視すべきである、と彼は同胞たちに注意を促している。彼が理解する「歴史的権利」とは、現住する人々を踏み躪るものではなく「その先祖伝来の土地に再び定住し、その土地を耕し、妨害されることなくその資源を開発する権利のみを意味し

⁹⁷ バルフォア宣言の全文は、Laqueur 1972 に写真が掲載されている。また、宣言に至る経緯については、Johnson 1988: 429ff／邦訳：206ffを参照した。

⁹⁸ ヴァイツマンはバルフォア宣言を最初にサイクスから見せられたときに、「私はこの子が最初は好きではなかった。この子は私が期待していたものではなかった」と言ったという (Johnson 1988: 430／邦訳：207)。アハド・ハアムが指摘するような文言の書き換えがあったことが原因であろう。

うる」(NJ: 159)ということであって、それ以上でも以下でもないのである。まして軍事的な力で相手を制圧する権利など与えられてはいない、という点についてもここでは念押しされている。アラブ人たちには、そこに長年住み続けてきたものとしての別の「具体的権利 (tangible right)」があり、その権利は守られなければならない、という彼の見解が以下の箇所に示されている。

しかし、この歴史的権利は、他の住民の権利を覆すものではない。その権利とは、この国での何世代にもわたる生活と労働に基づく具体的権利である。この国は、現在、彼らの民族的郷土 (their national home) でもあり、彼らもまた可能な限り、その民族としての潜在能力を発展させる権利を有している (NJ: 160)。

この「他の住民の権利を覆すことなく」という表現をアハド・ハアムは繰り返し用いているが、このようなアラブ人側の権利について、「宣言」に明記されているにもかかわらず、ユダヤ人側がそれを無視し、単純に「パレスチナが〈ユダヤ人の国〉になるのだ」(NJ: 162)、と考えるようになったことが、また、アラブ人たちを「入植活動が始まったばかりのことから無視してきた」(NJ: 162) ことが、1920年4月に起こったアラブ人による暴動の原因になっているとアハド・ハアムは指摘している⁹⁹。また、この暴動に言及するにあたって、彼は『真実』のなかで自らが発した警告、「アラブ人は砂漠の野蛮人ではない」という箇所を註で引き合いに出しているが¹⁰⁰、このことは、彼の中の「アラブ問題」についての問題意識が、表向きは影を潜めていたとしても、継続していたことを物語っているとも考えられるだろう。

「パレスチナを異なる（二つの）民の共通の地とする」(NJ: 160)、つまり二つの民族的郷土が同じ国に共存するようになれば、初めのうちは利害の対立があることが予想されるため、仲介者となるべき「管理者 (guardian)」(NJ: 161)が必要である、ともアハド・ハアムは言う。英国による委任統治を念頭に置いているのだろう¹⁰¹。しかし、やがてはユダヤ人とアラブ人による共同管理も可能になる日がくるかもしれない、という希望的観測もここでは提示されている¹⁰²。

2. 「バイナショナリズム」への影響

パレスチナに、二つの民族が共存していくべきであるというこのような考え方は、後に展開されるバイナショナリズム（二民族一国家主義）運動の原型

⁹⁹ NJ: 162. 1920年および21年の暴動については、本稿Vおよび註87を参照されたい。

¹⁰⁰ この註は英訳版には反映されていないが、翻訳者のサイモンはヘブライ語原典の註の内容について英訳版の註で言及している。詳しくは NJ: 162 の脚注1を参照されたい。

¹⁰¹ もっとも、パレスチナを巡る英国の政策が一貫性を欠いていたことは周知の通りである。バルフォア宣言については、アラブ国家独立を約束したフサイン・マクマホン書簡、およびパレスチナを国際的共同管理に置くことをフランス・ロシアと密約したサイクス＝ピコ協定との矛盾が問題視されている。臼杵 2009: 46ff を参照されたい。

¹⁰² NJ: 161

とも言えるだろう。アハド・ハアムの論考集¹⁰³の編集も手がけている H・コーン (Hans Kohn, 1891-1971) は、この 1920 年ごろからアハド・ハアムが「パレスチナにおける二民族国家 (bi-national Palestinian state) を支持するようになった」(Kohn 1962: 29) と言及している。また、イギリスの著名な研究者である B・クラッグ (Brian Klug) も、ここでのアハド・ハアムの発想に「バイナショナルイズムの構造 (a form of binationalism)」(Klug 2015: xxvi) を見出している (クラッグはハイフンを入れず “binationalism” と綴っている)。

1926 年に始まった「ブリット・シャローム」¹⁰⁴、またその後継団体で 1942 年に発足した「イフド」¹⁰⁵に代表されるバイナショナルイズム運動に関わり、アラブ人との平和的共存を目指した人々のなかには、何かしらの形でアハド・ハアムから影響を受けた人物が多く含まれている。これら二つの団体に貢献した M・ブーバー (Martin Buber, 1878-1965) はアハド・ハアムを師と仰ぎ、その著書の中で彼を高く評価した¹⁰⁶。また、そのブーバーと行動をともにしたプラハ・シオニストたちも好例である。前述のコーン¹⁰⁷、あるいは R・ヴェルチュ¹⁰⁸ (Robert Weltsch, 1891-1982), H・ベルクマン (Hugo Bergmann, 1883-1975) らの「ブリット・シャローム」の中心メンバーたち¹⁰⁹は皆、プラハのシオニスト団体「バル・コホバ」の頃からアハド・ハアム編集の月刊誌『ハシロア』を購読していたということが、ヴェルチュの証言から分かっている¹¹⁰。ベルクマンは 1916 年に「アハド・ハアムの民族的意義」¹¹¹という論考も発表している。コーンはアハド・ハアムを同時代の論客たちとの比較において高く評価し、「生前にこれほど広く、熱心に読まれ、また永続的、永久的に影響を与え続けた人物はいない」(Kohn 1962: 7) と言及している (ちなみにコーンは後に、ブ

¹⁰³ *Nationalism and the Jewish Ethic: Basic Writings of Ahad Ha'am*. 本稿では NJ と略記。

¹⁰⁴ 本稿の註 9 を参照されたい。

¹⁰⁵ 本稿の註 10 を参照されたい。

¹⁰⁶ ブーバーのアハド・ハアムへの評価については Buber 1950: 181-187 を参照されたい。ブーバーは、アハド・ハアムの「精神的センター」論に関連して、ヘルツルと比較しながら次のように言及している。「アハド・ハアムのシオニズムは〈より小さい〉のではなくて、〈より大きい〉のだ」(Buber 1950: 181)。「彼 [アハド・ハアム] にとって、ディアスポラとパレスチナは、政治的シオニズムが考えるような二つの異なる領域ではなく、一つの、唯一の身体なのである」(Buber 1950: 182)。またブーバーはアハド・ハアムを彼の「教師」と見做し、ヘルツルよりも重要であると考えていた (Kornberg [ed.] 1983: 145)。

¹⁰⁷ コーンは上述の論考集の前書きのなかで、アハド・ハアムを高く評価している。ただし、「歴史的権利」という概念については、コーンはまた独自の考えを持っていた。この点について本稿では掘り下げる余裕がないが、Kohn 1919 を参照されたい。

¹⁰⁸ ヴェルチュはジャーナリスト。『ユダヤ展望』『ハアレツ』等の編集に携わった。彼はブーバーと共に「ブリット・シャローム」、「イフド」双方に関わっている。

¹⁰⁹ ブリット・シャロームの主要メンバーには、他にもユダヤ神秘主義 (カバラ) の権威であるゲルショム・ショーレム (Gershom Gerhard Scholem, 1897-1982) も含まれる。ショーレムもまた、アハド・ハアムから影響を受けたとされている。

¹¹⁰ 1980 年の Jehuda Reinharz とのインタビューのなかで、ヴェルチュは彼やコーン、ベルクマンを含むバル・コホバのメンバーがアハド・ハアムから多大な影響を受け、その論考を翻訳して読んだと証言している。(Kornberg [ed.] 1983: 199)。

¹¹¹ “Die Nationale Bedeutung Achad Haam’s”は *Der Jude Jarg. I* に掲載された。

ーバーと決裂し、シオニズムと袂を別ち、アメリカで歴史学者となった)¹¹²。

また「イフード」の発起人である改革派ラビのJ・マグネス(Judah Leon Magnes, 1877-1948)もアハド・ハアムと関係が深かった。マグネスは、アラブ人には「自然な権利(a natural right)」が、ユダヤ人には「歴史的権利(historical rights)」があり、「双方は同等の価値を有する」としているが、この見解には(「具体的権利」,「自然な権利」という言葉遣いの相違はあるものの),アハド・ハアムの影響が反映されていることは明らかである¹¹³。「イフード」にブーバー、ヴェルチュラとともに参加していたH・アーレント(Hannah Arendt, 1906-1975)も、マグネスの追悼のために執筆した論文のなかでアハド・ハアムの功績について言及している¹¹⁴。彼らの主張はそれぞれ微妙に異なっているものの、皆、アラブ人とユダヤ人の協調の道を探る努力をしてきた人々である。

もっとも、結果だけを見れば、これらの運動はあまり成果を上げなかったかもしれない。ブリット・シャロームは、ユダヤ人入植の暫定的制限への同意のようなアラブ側に配慮した政策を打ち出したことによって他のシオニストたちと対立するなど活動は難航し、議長のA・ルッピン(Arthur Ruppin, 1876-1943)の脱退も経て1933年に活動を終了した¹¹⁵。イフードは1948年のマグネスの死によって、道半ばで実質的に活動を停止している。また、これらの活動を「ヨーロッパからパレスチナに移住するユダヤ人の居住権を正当化する論理」(早尾 2020: 59)に過ぎない、と突き放すこともできよう。だが、二つの団体の規約および綱領を見れば、少なくとも彼らはアラブ人たちとの平和的共存を明確な目標として掲げていたということは確かである。以下にその中から重要な部分を抜粋する¹¹⁶。

ブリット・シャローム(平和同盟)規約(1926年)第3項より

同盟の目標はユダヤ人とアラブ人との相互理解に至ることであるととも
に、文化的に自立した二つの民の絶対的な政治的平等にもとづいて両者
の相互的社会関係を形成し、国の発展のために両者が協力する際の方針
を決定することにある(Buber 1993: 107/邦訳: 49)。

「イフード」の綱領(1943年)第2項より

(...)イフードという連合は、アラブ^{フォルク}民族とユダヤ^{フォルク}民族との統一をめざす

¹¹² コーンのシオニズム脱退の経緯は、Buber 1993:134ff/邦訳: 73ffに詳しい。その中でコーンはアラブ人との共存への努力をユダヤ人側が怠ってきたと主張している。

¹¹³ この点についてはArendt 1950: 73を参照されたい。アハド・ハアムとマグネスの関係については、石黒 2018: 7-8でも言及されている。

¹¹⁴ アーレントはパレスチナにユダヤ文化の中心地を作るというアハド・ハアムの考え方、つまり「精神的センター」論を紹介した上で、ヘルツルの伝統の成果物である「ユダヤ人国家」が、アラブ・ユダヤ戦争という犠牲をもたらしたのに対し、アハド・ハアムの伝統の成果物はヘブライ大学の設立である、と言及している(Arendt 1950: 74-75)。

¹¹⁵ 『小百科』: 879

¹¹⁶ 以下の二つの訳文については、Buber 1993の邦訳版『一つの土地にふたつの民、ユダヤー アラブ問題によせて』から引用した。

ことで、われわれの国とその建設に係る死活問題と取り組む。この方向に向けて歩みつつ、連合「イフード」は、ユダヤ世界とアラブ世界が、社会的、経済的、文化的、政治的などすべての生活領域で協働することができるような道を探り、もって、セムの世界を甦らせようと努める（Buber 1993: 203／邦訳：133）。

特に注目すべきは、「イフード」の綱領のなかの「セムの世界」という表現である。このように両民族を二つの異なる民として見るのではなく、「セム人」として一つに括ろうという考え方は、『真実』におけるアハド・ハアムの言葉、「アラブ人は、全てのセムの子孫たちと同様に」（TR: 162）という表現を思い起こさせる。I・ハレヴィ¹¹⁷（Ilan Halevi, 1943-2013）はこの部分を引き合いに出して¹¹⁸、アハド・ハアムが独自の「親セム主義（philo-Semitism）」（Halevi 1987: 169／邦訳：282）の立場をとっている、と言及している（ハレヴィはダウティと違って、アハド・ハアムのなかに西洋至上主義的なものは見えない）。このようなハレヴィの視点から考えれば、イフードの綱領とアハド・ハアムの主張との共通項を見いだすことができるだろう。

パレスチナ和平のもう一つの解決策としては「二国家解決（Two-state-solution）」が挙げられる（米国のバイデン大統領は、この方針を掲げている）。しかし実際のところ、2000年の第二次インティファダの勃発およびそれを受けてのイスラエルからの徹底的弾圧によりパレスチナの独立も非現実的になっていくなか、バイナショナリズムについての議論も再燃しているという¹¹⁹。そのような状況を考慮すると、バイナショナリズムという発想の源泉としてのアハド・ハアムの主張は、今日でも尚、注目に値するものであるように思われる。

VII. おわりに

以上、ダウティによる翻訳および解説に依拠しながら、またサイモン、ズィッパースタインによる伝記等の助けを借りながら、「エレット・イスラエルからの真実」の全体像を概観してきた。その結果、これまで最も注目されてきた「アラブ問題」以外にも、投機取引による土地価格高騰、農業経営にまつわる困難、仲間内でのトラブルなど、初期入植活動が乗り越えるべき様々な課題が、この

¹¹⁷ ハレヴィはイスラエルとフランスの二つの国籍を持ち、のちにパレスチナ人となった。PLO 唯一のユダヤ人メンバーであったという異色の経歴を持つ。

¹¹⁸ ただしハレヴィは、このアハド・ハアムの発言を「1993年」のものであるとしており、その点については誤認している（Halevi 1987: 168／邦訳：281）。

¹¹⁹ バйнаショナリズムの変遷については、早尾 2020 の第二章「バイナショナリズムの思想史的意義」（59-88 頁）を参照した。バイナショナリズムの再評価は、1999年にサイードが「一国家解決」というエッセイの中で支持を表明したことが一つの契機となっている。このようにバイナショナリズムの復活はパレスチナ人の側から起こったものであること、また 20 世紀初めに起こったユダヤ人によるそれとは趣旨の異なる面があることを言い添えておく。早尾によれば、かつてバイナショナリズムは「ユダヤ人のパレスチナへの定着を正当化するロジック」であったが、2000 年以降の文脈では、「ユダヤ人国家を否定するための論理的かつ倫理的戦略として再登場」したということである（早尾 2020：65）。

論考のなかで取り上げられていることが確認できた。部分的な引用からは見えてこなかった『真実』の新たな側面を引き出すことができたこと、また論考全体という大きな枠組みの一部としての「アラブ問題」の位置付けを確認できたことは、本稿の一つの成果であった。

このように『真実』は、「アラブ問題」を含む様々な異なるテーマを扱っているのだが、論考全体に通底しているのは入植者たちの〈道德性の欠如〉への批判であると筆者は理解した。当時の入植者たちの振る舞いは、ユダヤ人同士の間であれ、またアラブ人に対してであれ、道德性を著しく欠いたものとしてアハド・ハアムの目には映った。それは、例えば紀元前1世紀生まれの偉大な賢者であるヒレル (Hillel) ¹²⁰の掲げる基本原則「自分自身に害となるようなことを、隣人になすなかれ (That which is hurtful to thee do not to thy neighbor.)」(Steinberg 1975:12 / 邦訳: 28)に見られるようなユダヤ教の伝統的な道德観に反するものでもある。アハド・ハアムは、ユダヤ教とキリスト教を比較した1910年の論考「ユダヤ教と福音書 (“Al shete se'ifim”, 英訳は“Judaism and Gospel”)」¹²¹のなかで、このヒレルのシンプルな教えを「絶対的な正義 (absolute justice)」(TE: 236)の原則として高く評価している。同胞たちへの厳しい批判は、ユダヤ的伝統に基づく〈正しさ〉に立ち返ることを促すためのものでもあり、そしてそれは、アハド・ハアムが重要視する「民族感情」の再生のためにも不可欠なことであったろう¹²²。アハド・ハアムが道德性(あるいは倫理性)、を第一原理としていたことは、自らが率いる精鋭集団の名称に「ブネイ・モシェ (モーセの息子たち)」を選んだということからもわかる。モシェ (モーセ)の名は「道德的な卓越性と真理への献身の象徴として」(Kornberg [ed.] 1983: 99)選ばれたのである。

同時にここでの彼の指摘には、〈ユダヤ人〉という特定の集団だけではなく人間全般にあてはまる普遍的な問題が炙り出されてもいる¹²³。例えば「模倣の資質」とその弊害についての考察は¹²⁴、私たち日本人にとっても他人事ではないだろう。また、アラブ人の権利侵害に関連する箇所での「奴隷であったものが主人になる」ときの心理の分析は、国家間の紛争から、職場や学校などでの人間関係まで、あらゆる規模のトラブルに当てはめて考えることができよう。

ここで、冒頭で掲げたもう一つの課題、ダウティの見解について検証してお

¹²⁰ ヒレルは紀元前一世紀の賢者で律法学者。多くの弟子をかかえ、ヒレル学派を成した (Steinberg 1975: 12 / 邦訳: 27, および邦訳: 27 の註 (1) 参照)。

¹²¹ “Judaism and Gospel” (TE: 223-253)。ヒレルについての言及は TE: 235 にある。この論考のなかで、アハド・ハアムはキリスト教の黄金律「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイ7章12節)とヒレルの原則とを比較している(訳文は『新共同訳』より)。

¹²² アハド・ハアムはユダヤの伝統を重視していたが、彼にとっての Judaism とは、「ユダヤ教」という訳語から連想されるような宗教的なものとしてだけではなく、より広義のユダヤ文化全般として理解されるべきものであって、むしろ Jewishness という概念に近いものであると筆者は理解している。その点において、彼はいわゆる「宗教的シオニスト」とは異なるということに留意すべきである。

¹²³ クラッグは、アハド・ハアムはユダヤ人に向けて話していると同時に、その他多くの人間全般に向けて話しているのだ、と評しているが、同感である (Klug 2015: ix)。

¹²⁴ 本稿のⅢ-6を参照されたい。

きたい。何度も言及したように、ダウティは『『真実』』についての真実は、アラブ問題は主な関心事ではなかったということだ」(TR: 157)と主張している。この主張の裏付けとして彼は、論考全体に占める「アラブ問題」への言及の比率が極めて低いこと、またアハド・ハアムがこの問題について継続的に論じてこなかったことを挙げている。比率については数値的分析からも自明であるので異論の余地はない。その点では、例えば後のエプシュタインの「隠された問い」、コーンの「アラブ問題をめぐって」¹²⁵のような、まさに「アラブ問題」を主題としたものとは『真実』は性質が異なっている。また継続性についても、確かにダウティの言うとおりの『真実』以降、アハド・ハアムは長い間、アラブ人住民との関係について大々的に取り上げることはなかった。そのようなことが、この問題に対するアハド・ハアムの関心の低さを表していると彼は判断したのである。

しかし、本稿でも見てきたように、1920年に書かれた「バルフォア宣言の後で」のなかで展開される明晰な「アラブ問題」への言及、またバイナショナリズムの基礎となるような主張からは、アハド・ハアムが『真実』における自身の問題提起を出発点として、この問題について継続的に関心を寄せ、考察を深めていたことが窺える¹²⁶。この晩年の論考の註のなかで、アハド・ハアムは三十年前の『真実』を引き合いに出しているが、そのことは、このテーマが彼の中では一本の糸で繋がった継続的な課題であったことを示しているのではないだろうか。後のより明快な主張を培うための土壌として、『真実』の執筆は十分に意義あるものだったと筆者は考える。

加えて、仮に執筆当時には「主な関心事」ではなかったとしても、それがこの論考における「アラブ問題」への言及の重要性を判断する基準とは必ずしもならない。本稿のVIで見てきたように、のちにアラブ人との平和的共存という課題に真剣に取り組んだユダヤ人たちの多くは、何かしらの形でアハド・ハアムから影響を受けた人々であった。そのことから、彼がこの「アラブ問題」に最初に投じた一石の持つ意味は大きいと筆者は考える。ダウティ自身も言及しているように、「アラブ問題」についての彼の見識は同時代のシオニストたちのそれを「はるかに超えていた」(TR: 157)ことは事実であり、その点はやはり素直に評価するべきであろう。そう言った意味では「主な関心事」であったかどうかを問うこと自体、あまり重要なことではないのかもしれない。

またダウティは、この論考におけるアラブ人への言及は、民族間の相互理解やアラブ人の人権擁護を目的としたものというよりは、入植活動を成功に導くための「戦略全般の一つ」に過ぎなかった、と主張している。たしかに、ダ

¹²⁵ Kohn: 1919. この論考でコーンは、まずパレスチナが「アラブ人の土地」であることを認識するよう促し、その上で、言語等を含めた民族間の相互理解を深めること以外に道はないと主張した。

¹²⁶ ダウティも取り上げているヘルツルの『古くて新しい国』への批判、また書簡等のなかで、アハド・ハアムは時折、「アラブ問題」について言及はしている。1913年のスミランスキー宛の書簡のなかで、ユダヤ人によるアラブ人虐待事件を嘆いて、次のように語っている。「もしパレスチナのユダヤ人たちが、ほとんど力を持っていない今、自制心と節度を守れないのであれば、我々が土地とそこに住むアラブ人たちを支配したときには、どんなに酷いことになるだろう」(Zipperstein 1993: 246-247)。

ウティが目敏く指摘しているように、論考全体を注意深く読んでいくと、僅かではあるが、アラブ人蔑視とも取られかねない物言いが散見される。また、『真実』のなかで最も頻繁に引き合いに出される箇所、アラブ人は「砂漠の野蛮人」ではない、という発言についても、部分的に読めばアラブ人の人権擁護を訴えているものと理解されるが、段落全体を読んでいくと、むしろ彼らを過小評価することによってユダヤ人側が不利益を被ることへの警告という側面も読み取れる。このように見ていくと、確かにこの頃のアハド・ハアムの言葉はアラブ人に完全に寄り添ったものではなかったかもしれない。例えば、エプシュタインの「隠された問い」に見られるようなアラブ人への素朴で率直な共感のようなものが、『真実』におけるアハド・ハアムの筆致からは感じられないことも事実である¹²⁷。その点についてはダウティの主張にも一定の説得力がある。ちなみにアハド・ハアムが直接、アラブ人と接触したという記録は残されていないようだが¹²⁸、当時の彼の発言に説得力が足りないとするれば、そういった〈肌感覚〉が不足していたことも一つの原因とも考えられる¹²⁹。

ただし、ここでのアハド・ハアムの発言が全て「戦略にすぎない」というのは少し言い過ぎであろう。少なくとも彼は同胞たちのアラブ人への態度を、不当で恥ずべきものであると考えていたし、他の多くのシオニストたちがアラブ人を〈人間〉として扱わなかった時代に、彼らに対して「愛と尊敬」、「正義と公正さ」(TR: 175)をもって接するべきであると訴えたのである。同胞たちがその後、数十年にわたって認めようとしなかった〈真実〉を彼は誰よりも早く、しっかりと受け止め、そして〈証拠〉として書き残した。そのことに十分な意義があると筆者は考える。確かにアハド・ハアムの考えに則れば、他者に対して道徳的に正しく振る舞うことは、相手のためのみならずユダヤ人の民族感情の再生にもつながり、結果的に入植活動にとっても利することになるだろう。また、百歩譲って、彼が守りたかったのは〈アラブ人〉ではなくてユダヤ人のアイデンティティーとしての〈正義〉であったと解釈することもできなくはない。だからと言って、彼の発言を「戦略」という言葉で呼んで一蹴することには抵抗感を覚えるものである。アラブ人に対する不遜な態度を批判した第38段落全体を改めて読み返してみても筆者が読み取ったのは、少なくとも同胞たちの「恥ずべき」行いに対する真剣な忠告であり、そのような打算に満ちたものではなかった、ということを読み添えておきたい。

前述のように、この論考はホヴェヴェイ・ツィオン内外からの激しい批判に晒され、またそれによってアハド・ハアム自身の政治的立場も失墜した。そう

¹²⁷ エプシュタインは、アラブ人の家族が住み慣れた土地を迫られて去っていく様子を生々しく描写している。また、アラブ人女性の歌う「哀歌」が耳を離れない、とも語っている (Epstein 1907: 38)。

¹²⁸ Zipperstein 1993: 61

¹²⁹ ちなみに、のちの1922年に、数名の若いユダヤ人が報復としてアラブ人の少年を殺害した時、アハド・ハアムは心からの悲しみを表した手紙を新聞社(ハアレツ)に送っているが、そこでの彼の言葉はもっと真に迫ったものである。「神様、これが我々の祖先たちが切望してきた、そしてそのためにあらゆる苦難に耐えてきた、そのゴールなのですか。(…)我々はシオンに来て、その地を罪なき血で汚すのですか」(cit. in Kohn 1962: 26-27)。

いった意味では、執筆当時はあまり影響力を持たなかったのである。しかし、そのうちのほんの一部である「アラブ問題」についての言及箇所が今日まで繰り返し引用され、読まれているということの意味を、我々は改めて考えるべきであろう。

この『真実』という論考には、同胞たちへの厳しい批判だけでなく、アハド・ハアムの考える入植活動のあるべき姿、理想が掲げられてもいるということにも言及しておく。特筆すべき点としては、アハド・ハアムの中心概念である「精神的センター論」の青写真とも言えるような箇所が所々に見られるということである。「精神的センター論」の誕生を予感させる記述は二年前の「誤った道」にも見られたが、『真実』においては、その輪郭が一層、明確になってきている。小規模でも民族の精神と誇りを保てる場所、「他の人々と同様に顔をあげていられる」(TR: 161)、そのような文化的、精神的中心地を築くことが、ディアスポラも含めたユダヤ人全体の支えになるという彼の理念は、民族間の争いの最大の原因である人口比率へのこだわりを捨てることにも繋がる。ブーバー等のパイナショナリストたちが彼の「精神的センター論」を高く評価した理由のひとつには、そういったこともあるだろう¹³⁰。この概念がこの後どのように展開されていくのか、本稿での研究を踏まえた上で考察していくことを今後の課題の一つとしたい。

本稿ではユダヤ人の「加害者」的な側面に触れざるを得なかったが、離散の民となって以来、長きにわたって彼らが迫害に苦しんできたことを決して忘れてはならないのは当然のことである。また、目下、問題視されているイスラエルによるパレスチナ人への人権侵害も、元を辿ればボグロム、ホロコーストというユダヤ人への残虐行為によって誘発された「負の連鎖」の結果であるということを常に心に留めておきたい。今日もイスラエルの政策によってパレスチナ人の土地が奪われ続けていると同時に¹³¹、パレスチナ側のテロ行為によるイスラエル側の犠牲者もまた後を絶たないのである¹³²。両民族の相互理解の深まりと事態の改善を願ってやまない。

¹³⁰ ブーバーの「精神的センター論」への評価については本稿の註112を参照されたい。

¹³¹ イスラエル政府が無認可入植地の（アウトポスト）の合法化を進めていることにより、土地を追われるパレスチナ人が一層、増加しているという。

¹³² まさにこの論文執筆の最中（2022年11月23日）にも、パレスチナ人武装勢力によってエルサレムのバス停付近が爆破され、16歳の少年を含む二名が犠牲となった。

表1:「エレツ・イスラエルからの真実」の構成

段落	内容 (各段落の内容を一言に凝縮したもの)	行数	アラブ人への言及
1	エレツ・イスラエルは再生できるか？(導入)	8	○
2	真実の「最も醜い部分」を明らかにしたい	16	
3	エレツ・イスラエルは理念的側面を背負う中心地となるべき	20	
4	優れたリーダー、統一性の必要性について	12	
5	優良な土地を手に入れることの難しさ	13	○
6	アラブ人は「砂漠の野蛮人」ではない(アラブ問題)	18	◎
7	「トルコ政府を賄賂で操ることはできない」	12	
8	熟練したリーダー、民族の統一性の必要性について	23	
9	現状直視の必要性について	4	
10	入植が正当化される条件(労働への覚悟、良いリーダー)	15	
11	10で示した条件の欠如について	3	
12	「ベテン師」による「薔薇色の未来の捏造」について	28	
13	ワイン生産に関連してのホヴェヴェイ・ツィオン批判	14	
14	ワイン生産に関する経験不足の問題、リスクについて	29	
15	「額に汗して身の丈にあった暮らしをすべき」	30	
16	ユダヤ人の「模倣の資質」、良きリーダーの必要性	25	
17	養蚕流行への疑問	13	
18	楽観論批判	6	
19	貧民増加への懸念	22	
20	投機家の増殖による土地高騰について	37	
21	投機家の増殖による諸弊害について	6	
22	ユダヤ人同士での騙し合い、不誠実な取引への懸念	7	
23	「最も高尚な理念も汚されてしまう」(22への警告)	3	
24	様々な団体の乱立による弊害について	8	
25	「全ての人が戻ってくることができる中心地」が必要	32	
26	情報を誇張して伝えることの弊害について	16	
27	情報の「捏造と幻想」による土地高騰、トルコ政府の敵意誘発への懸念	16	○

28	状況悪化への懸念	5	
29	土地購入に関する情報収集力の欠如, フランシスコ会士との比較	10	
30	基本的情報の欠如への懸念	39	○
31	執行委員会による不確かな「助言」への批判	13	
32	既に持っている経験から学習する能力の欠如について	4	
33	報道の不正確さへの批判	11	○
34	農業に対する誠実な取り組みの欠如について	15	○
35	農業, 肉体労働に対する愛着, 忍耐力の欠如について	21	
36	「労働者グループ」のモラルの問題について	25	
37	ユダヤ人労働者を人工的に増やすことについて	6	
38	原住するアラブ人に対する不当な扱い(アラブ問題)	21	◎
39	「ユダヤ人問題」の解決の代わりに「ユダヤ人に問題」をつくりだしてしまうことへの懸念	14	
40	ではどうすればいい?(短い繋ぎの段落)	2	
41	イスラエルの民の解放は慈善家や東欧のユダヤ人には成し遂げられない	11	
42	西欧のユダヤ人のリーダーシップへの期待	32	
43	理想的な組織運営モデルの提示	20	
44	「今後は自分よりもよい案を出せる人がでてくるだろう」	4	
45	「トランス・ヨルダンから始めるべき」という提案	23	
46	「祖国の破壊」と「民の破壊」について	14	
47	「私の哀歌はシオンではなくてイスラエルから始まる」(結び)	4	
	行数合計	730	
	「アラブ問題」に関連する箇所の行数	39	
	論考全体に対する「アラブ問題」に関連箇所の比率	5%	
	アラブ人についての言及がある行の比率	6%	

◎＝「アラブ問題」についての段落

○＝「アラブ人」という語を含む行が 1 行だけある段落

＊ 参考文献

- ・ 以下、本稿で言及した文献のみを、著者名のラテン語文字アルファベット順で、参照の便宜上一次資料と二次資料および言語の区別なく掲載する。
- ・ Asher Ginzberg については、筆名の Ahad Ha'am で列挙してある (Ahad として)。
- ・ [] で括られた刊行年は初版の出版年である。

- Ahad (Achad) Ha'am (Ha-am) [Asher Ginzberg], 1922, *Ten Essays on Zionism and Judaism*, trans. from the Hebrew by Leon Simon, London: George Routledge & Sons, Ltd. = TE
- , 1913, *Am Scheidewege*, Erster Band, aus dem Hebräischen von Israel Friedlaender, Zweite verbesserte und vermehrte Auflage, Berlin: Jüdischer Verlag. = SW1
- , 1916, *Am Scheidewege*, Zweiter Band, aus dem Hebräischen von Dr. Harry Torczyner, Berlin: Jüdischer Verlag. = SW2
- , [1891,1893] 1923, “Wahrheit aus Palästina,” *Der Jude*, Jahrg.7, Liechtenstein: Topos Verlag AG Vaduz, 1979, 257-268. = WP
- , 1946, *Essays, Letters, Memories*, trans. from the Hebrew and edit. by Leon Simon, Oxford: East and West Library. = EW
- , 1962, *Nationalism and the Jewish Ethic: Basic Writings of Ahad Ha'am*, ed. & intr. by Hans Kohn, New York: Herzl Press. = NJ
- Arendt, Hannah, 1950, “Peace or Armistice in the near East?,” *The Review of Politics*, Jan., Vol.12, No. 1 (Jan.,1950), 56-82.
- Bergmann, Hugo, 1916, “Die nationale Bedeutung Achad Haams,” *Der Jude*, Jahrg.1, Liechtenstein: Topos Verlag AG Vaduz, 1979, 358-361.
- Buber, Martin, 1950, *Israel und Palästina: zur Geschichte einer Idee*, Zurich: Artemis-Verlag.
- , [1983] 1993, *Ein Land und Zwei Völker, Zur jüdisch-arabischen Frage*, hrsg.und eingeleitet von Paul R. Mendes-Flohr, Frankfurt am Main: Jüdischer Verlag. = 2006, 合田正人訳, 『ひとつの土地にふたつの民, ユダヤ — アラブ問題によせて』, みすず書房.
- Cohn-Sherbok, Dan & Dawoud El-Alami, [2001] 2003, *The Palestine-Israeli Conflict: A Beginner's Guide*, Oxford: Oneworld Publications. = 2011, 臼杵陽監訳, 『双方の視点から描くパレスチナ／イスラエル紛争史』, 岩波書店.
- Dowty, Alan, Ahad Ha'am and Asher Ginzberg, 2000, “Much Ado about Little: Ahad Ha'am's 'Truth from Eretz Yisrael,' Zionism, and the Arabs”, *Israel Studies*, Fall 2000, Vol.5, No.2, (Fall 2000), 154-181. = TR
- Dowty, Alan, 2021, *Arabs and Jews in Ottoman Palestine, Two Worlds Collide*, Bloomington, Indiana University Press.
- Epstein, Yizhak, [1907] 2004, “A Hidden Question”, Shatz, Adam [ed.], *Prophets Outcast: A Century of Dissident Jewish Writing about Zionism and Israel*, New York: Nation Books, 36-52.
- Halevi, Ilan, 1987, *A History of the Jews, ancient and modern*, translated by A.M.Berrett, London: ZED BOOKS. LTD. = 1990, 奥田暁子訳, 『ユダヤ人の歴史』, 三一書房.
- Herzl, Theodor, [1978] 1985, *Wenn ihr wollt, ist es kein Märchen: Altneuland/Der Judenstaat*, Hrsg.von Julius H. Schoeps, Jüdischer Verlag bei Athenäum.

- 早尾貴教, 2020, 『パレスチナ／イスラエル論』, 有志舎.
- 石黒杏里, 2018, 「1900年代から1920年代における文化シオニズムのアメリカ化 — アハッド・ハアム受容のプリズムとしてのマグネス, カプラン, カレン」, 『一神教世界』第9号, (同志社大学一神教学際研究センター), 1-18頁.
- Jeffries, Joseph Marie Nagle, 1939, *Palestine: The Reality*, London: Longmans.
- Johnson, Paul, *A History of the Jews*, [1987] 1988, New York: Harper & Row, Publishers. = 1999, 石田友雄監修; 阿川尚之, 池田潤, 山田恵子訳 『ユダヤ人の歴史』(下巻), 徳間書店.
- Kaplan, Eran and Derek J. Penslar [ed.], 2011, *The Origins of Israel, 1882-1948: A Documentary History*, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Klug, Brian, 2015, "Introduction," *Words of Fire, Selected Essays of Ahad Ha'am*, with an introduction and supplementary notes by Brian Klug, London: Notting Hill Editions.
- Kohn, Hans, [1919] 1979, "Zur Araberfrage," *Der Jude*, Jahrg.4, Liechtenstein: Topos Verlag AG Vaduz, 567-569.
- , 1962, "Introduction," *Nationalism and The Jewish Ethics: basic writings of Ahad Ha'am*, New York: Herzl Press.
- Kornberg, Jacques [ed.], 1983, *At the Crossroads, Essays on Ahad Ha-am*, New York: State University of New York Press.
- Laqueur, Walter, 1972, *A History of Zionism*, New York: Holt, Reinhart and Winston. = 1987, 高坂誠訳, 『ユダヤ人問題とシオニズムの歴史』, 第三書館.
- Novek, Simon [ed.], 1963, *Great Jewish Thinkers of the 20th Century*, Washington: The B'nai B'rith Department of Adult Jewish Education. = サイモン・ノヴェック (編), 1996, 鶴沼秀夫訳, 『二十世紀のユダヤ思想家』, ミルトス.
- 崎川あんぬ, 2022, 「「民族感情」か「個人主義」か? — 初期論考「誤った道」におけるアハッド・ハアムのホヴェヴェイツィオン批判 —」, 『日本アジア研究第19号』(埼玉大学人文社会科学部研究科後期博士課程紀要), 1-37頁.
- Shatz, Adam [ed.], 2004, *Prophets Outcast: A Century of Dissident Jewish Writing about Zionism and Israel*, New York: Nation Books.
- Simon, Leon, 1960, *Ahad Ha-am, Asher Ginsberg – a Biography*, London: East and West Library.
- Steinberg, Milton, [1947] 1975, *Basic Judaism*. San Diego: Harcourt, Brace. = 2012, 『ユダヤ教の基本』, 山岡万里子／河合一充訳, 手島勲矢監修, ミルトス.
- 鶴見太郎, 2012, 『ロシア・シオニズムの想像力 — ユダヤ人・帝国・パレスチナ』, 東京大学出版局.
- 臼杵陽, 2009, 『イスラエル』, 岩波書店.
- Zipperstein, Steven, 1993, *Elusive Prophet-Ahad Ha'am and the origins of Zionism*, London: Peter Halban.

* その他の参照資料

- 共同訳聖書実行委員会, 『聖書 新共同訳 — 旧約聖書続編つき』, 1987, 1988, 日本聖書協会. = 『新共同訳』
- ユーリウス・H・シェップス編, 石田基広 他訳, 『ユダヤ小百科』, 2012, 水声社. = 『小百科』

The Truth about “Truth from Eretz Yisrael” On Ahad Ha'am and “the Arab Issue”

Annu Sakikawa

The essay “Truth from Eretz Yisrael”, written in 1891 by Ahad Ha'am, an advocate of spiritual (or cultural) Zionism, is one of the most frequently cited references in Zionist studies, because this essay has been regarded as the first analysis of the so-called “the Arab issue,” i.e., the conflict between Jews and Arabs in Palestine. For this reason, most of the references to this essay have been related to the “the Arab issue,” and the essay as a whole has not been the subject of much discussion. This paper, therefore, aims to review the entirety of the essay, confirm the position of the “the Arab issue” in it, and reconsider Ahad Ha'am's views on the subject, using the English translation by Alan Dowty (the complete translation) and the commentary. Another goal of this paper is to examine Dowty's assertion which is found in the commentary, that “the Arab issue” was not “the main concern” of this essay.

As a result of this study, I confirmed that the “the Arab issue” accounts for a very small percentage of the total and that there were some ambiguities in Ahad Ha'am's attitude towards Arabs in this essay. Judging from the points mentioned above, I have come to accept that Dowty's assertion has a certain validity. On the other hand, I argue that his comment is not the basis for denying even the significance of Ahad Ha'am's statements at the time, and that Ahad Ha'am's view on “the Arab issue” in this essay should be highly evaluated for its foresight and precision. I also emphasize the influence of this essay on the Jews who tried to find the ways to achieve peaceful co-existence with Arab inhabitants, especially bi-nationalists such as M. Buber and J. Magnes etc.

Keywords: Ahad Ha'am, “the Arab issue”, bi-nationalism.